



TITLE:

家畜と家僕 一去勢牡誘導羊の地理的分布とその意味一

AUTHOR(S):

谷, 泰

CITATION:

谷, 泰. 家畜と家僕 一去勢牡誘導羊の地理的分布とその意味一. 人文學報 1992, 71: 53-96

ISSUE DATE:

1992-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/48385>

RIGHT:

家畜と家僕

—去勢牡誘導羊の地理的分布とその意味—

谷

泰

- I はじめに
- II 誘導羊／山羊利用技法の三タイプとその地理的分布
- III 放牧中の誘導羊の行動とその機能
- IV 家畜と家僕



図 1

(Henckel, A. & Schöne, A. 1967:538)

I はじめに

まづひとつのエピソードから始めることにしたい¹⁾。

インドのカシミールの山中での出来事である。夏営地に赴くバッカルワラの牧民が6月中旬、ながい移動ののち、高所の夏営地²⁾の手前にまでやってきたときであった。雨の中、川は雪解け水によって増水していた。すでに午後4時近くになっており、霧が出ていたためもあって、あたりは薄暗くなっていた。夏営地はすぐ対岸に見えるのに、そこに達するためにはどうしても、連れてきた山羊の群をして、その川を渡らさなければならない。川幅は10メートル余りだが、川岸から水面にかけて、若干の落差がある。そのためもあって、臆病な山羊はなかなか渡ろうとしない。牧夫は、一頭をとにかく川につき落としてでも渡らせれば、他のものも追隨して渡ることを知っている。にもかかわらず当の一頭につき落とすことが一苦労なのである。群

がっている山羊のうち、一頭をとらえて、川に向けて追い落とそうとするのだが、恐れおののいた山羊は、渾身の力で牧夫の手からすり抜ける。そこで牧夫は別の個体にむかっておなじことを試みる。しかしそれも成功しない。こういうことを繰り返すうちに、ひとたび怖気づいて興奮した山羊たちは、もはや人の手には負えない群になってしまった。結局、加勢の他の牧夫を呼んで、3人がかりで、ようやく一頭を川につき落とすことに成功した時には、すでに半時間経っていた。ところで、この一頭が追い落されて、懸命に川を泳ぎ渡るや、後の山羊たちは、牧夫の追い立ても手伝ってはいたが、次々に川に飛び込んだ。そして数分のうちに全てが渡り終えたのである。

同様の状況に直面して、キルギスの遊牧民が、自ら一頭を小脇に抱えて渡り、後のものを渡らせたのを目撃した報告を聞いたことがある。

他方、ヨーロッパの17世紀の印章で、これとまったく同じ状況で羊の群れをして、川を渡らせている光景を描いたものがある（Henckel, A. & Schöne, A. 1967: 538, 図1参照）。つまり、一頭の大きな鈴をつけた羊が、牧夫の命令で、勇敢にも先頭を切って川を渡り、他の雌群がそれにしたがう光景が描かれている。その絵の横にはコメントが記されている。それによって、この光景は、先導的な去勢された牡羊に従う雌群たちを描いたもので、それによって、指導的な君主のリーダーシップに生死をものともせず従う、いわば理想的な先導者と忠誠な服従者との関係をアレゴリカルに示唆したものだ、ということがわかる。ともあれこの先頭の鈴をつけた牡羊は、ヨーロッパでその利用が知られている、牧夫の訓育を受けた一種の誘導用去勢牡なのである。

さきのインドのバックルワラの牧民が、もしここに描かれているような牧夫の命令にしたがう牡羊を養成していたならば、さしづめ先ほどのような川を渡らせねばならない状況で、あれこれとあわてふためいて、羊をつき落すのに時間と労力をかけなくてもすんだはずなのである。ところが彼らは、このような牧夫の命令に忠実かつ勇敢な先導リーダーといえる去勢牡を育成しておらず、そのような便利な技法のあることさえ知らない。

羊は臆病な動物である。川でなくとも、若干の溝や小川や少々の段差のある崖があるとき、先を恐れて立ち止まる。そして後ろから追隨してくる群れの流れがそこで阻まれて、膨れ上がり、後続のものはけっきょく脇にそれ、時に左右に分裂する。通常は二人で群を誘導している牧夫にとって、このような事態はできるだけ避けなくてはならない。さもないければ、かれらは、再び群れをまとめるのに、労力と時間を費やさなければならない。移動中の群れは、常にスムーズに進行するのが好ましい。なにか障害があって、先頭が立ち止まるような時、右往左往することなく、ある一頭を、牧夫の命令にしたがって先頭をきるように仕立てておくことは、追隨性のある群れの放牧管理にとって好ましい。いやそれだけではない。日帰り放牧中、また季節移動中も、群れの進行を方向付けたり、時に方向転換をして戻って来させたいときがある。

そのようなとき、牧夫の音声による呼掛けのサインを理解し、その命令におうじて行動する個体を、群れのなかに一頭でも仕立てていれば、牧夫の放牧管理はより効率的で、容易になる。

もちろん、先のインドのバックルワラは、このような牧夫の命令サインを理解する羊（以下それを誘導羊ということにする）の利用技法を知らないにもかかわらず、大きな群れを放牧管理しえている。このように考えれば、労力や時間を浪費することをさておくとすれば、この管理技法が、放牧群の管理にどうしてもなくてはならない、必須のものだということにはならない。しかも、後に明らかにするように、群の中の特定個体を利用して、追従性のある群のスムーズな移動や、牧夫の望んだ方向への移動を誘発する技法は、たんにこのヨーロッパで知られている、訓育を受けた去勢牡誘導羊によってのみ達成されているわけではない。特定の雌が別の仕方で養成される事例（後述）もあるばかりか、われわれは、中近東でしばしば見かけることが出来る、先頭にとびだす傾向の高い山羊をいく頭か羊群の中にいれて、スムーズな移動を促す技法のあることを知っている。訓育した去勢牡による群誘導技法と云って、要は放牧群管理上の基本的な技法³⁾のうえに付加された、群誘導技法のひとつであるに過ぎず、いわば群管理技法上の一エラボレーションにすぎない、ということもできる。ただこのような効率という視点とは別に、筆者は、かつて（1970年）イタリア中部移牧村（アブルッツォ、ボマノ川流域のチェルクエト村。谷，1976b，及び1977参照）でこの誘導羊の利用技法を目撃して以来、以下に示すような理由で、この技法に注目してきた。

その注目の理由はまず、イタリア中部の牧夫の、その去勢牡誘導羊の養成法と、他の並個体とは異なって特異的にマークされた当の個体への偏愛とも形容できる執着であり、さらにこのように特異的にマークされる去勢牡誘導羊が、管理する牧夫と管理される群とのあいだで担う役割と位置の特異性によるものであった。

まずその養成法だが、それはきわめて手の込んだ、丁寧なものである。彼らは、生まれた当歳子のうち、種牡候補に定めたもの以外は、その大半を殺す（谷，1977：pp. 155-157）。その残された種牡候補のなかから、二年目になったとき、誘導羊に適していると見なしたものを去勢する。そして、首に毛糸の短い紐をつけ、常に犬を連れて歩くようにして、当の牧夫との親和性を高める。もちろんそのとき、他の並の個体には与えることのない固有名をあたえて、呼びかけつつ、なぜやり、まずその名前を覚え込ませる。要はこの固有名を与えて呼びならすことで、特異的に当の個体の注意を喚起することができるようになっている。それと同時に、いくつものコール・サイン、「こちらに來い」、「前に進め」、「止まれ」といった命令内容をもつ音が発せられたとき、それにしたがって反応するように、牧夫はその内容を教え込む。もちろんその際、言葉で教え込めない以上、ある音声がいかなる行動への要求であるかは、いわば身をもって了解させなければならない。首につないだ紐はそのためであり、名を呼び、コール・サインを発しては、状況に応じて、紐を引いたり緩めたりして、どう反応すればよいかを教え

込むのである。まずこうして、このコール・サインをほぼ学んだ段階で、牧夫は、つぎにその紐を長くして、当の羊を、並の羊からなる群れのなかにいれる。要は群の中に戻しても、正しく反応できるようにするためであり、さらに同様の訓育をほどこす。そして群れのなかでも、牧夫のコール・サインに応じて、行動するようになったと思えたとき、紐を解く。こうして訓育を終え、誘導羊が誕生する。

ところで、この誘導羊は一般にマンツイエロ (manziero) とか、グイダレロ (guidarello, つまり小さい、あるいは可愛いガイドということになろうか) と呼ばれるが、牧夫が実際に与える固有名は、ジェネラーレとかムッソリーニといったニックネームであり、群のリーダーを象徴する意味合いが込められるものが少なくない。しかも牧夫にとって、この誘導羊はきわめて大切な、愛すべき従者ともいえるものとみなされているのだろうか。それを盗まれたときなどには、血を見る争い (vendetta) となるとも云われている。

この去勢誘導羊を、牧夫はたんに季節移動時に川を渡ったりするときに利用するだけではない。毎日の放牧中、群の方向を転換したり、呼び戻したりするときにも用いる。また雪中行進のときなどにも、雌では弱いために、先頭をゆくようにさせて、道あけにも用いる。このようにみえてくると、去勢牡誘導羊は、放牧管理において、牧夫にとってのきわめて重要な手先として用いられていることになる。イタリアの牧夫が、盗まれたとき、血を見るほどの報復の動機となる理由も、十分了解されよう。

ところで、具体的な誘導羊の育成法、牧夫の特異的な関心の強さとは別に、いまこの去勢牡誘導羊を、より一般的な視点、群を管理する牧夫と管理される群との関係性のなかでの役割位置という視点からみると、そこに次のような興味ある地位と役割を、それがもっていることに気付く。

かれは、群の管理者である牧夫との間に醸成された、特異的な親和性を基礎に訓育を受けて、牧夫の言葉を理解する特異的な個体になっている。管理者である牧夫は、この絆を介して、群をコントロールする。去勢牡誘導羊は、この点で、他の群メンバーとは異なる特異的な絆を、管理者牧夫ととり結ぶことで、管理者の手先としての役割を果たしている。もちろん彼は他方で、どこまでも一頭の羊として、管理される側に属す。ところで、かれは去勢されている。一般に去勢すると、肉が柔らかくなるということとは別に、従順になるとも云われる。こうしてかれは、去勢されることによって、まさに性による充足はもちろんのこと、群の再生産過程から疎外され、性的能力を犠牲にすることで、「管理するもの」と「管理されるもの」とを媒介する仲介者の役割を担う立場に引き上げられている、ということになる。おまけに、一般的に云って、地中海地域の移動放牧する羊の群は、そのほとんどが雌である。去勢牡誘導羊は、性の抑制を通じて、その雌群を管理する立場に立つことになっているともいえる。

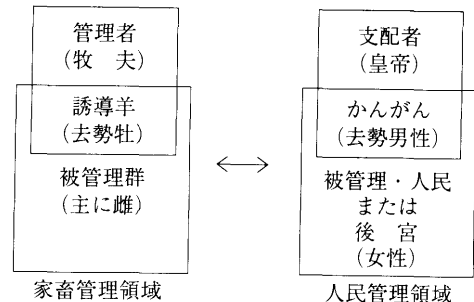
ここで想起されるのは、中近東の古代帝国で多く用いられた宦官である。アリストテレスは、

宦官を、まさに支配者である皇帝と人民との間にあって、皇帝の意を伝える役割を果たすと述べている。つまり、宦官は皇帝と人民との間をとりもつ仲介者と定義できる。かつ、宦官は、去勢されることで、後宮の女性たちを守り監視する役割をも果たす。去勢され、子を持ってないことで、支配者の安心をかり取り、支配者の側近としての立場に引き上げられている。このようにみえてくると、宦官は、去勢されることで、支配するものと支配されるものとの間を取り持つ仲介者という役割を果たす点で、まさに去勢牡誘導羊と同じ位置どりと役割を担っているといえることが出来る。

このように見てくると、去勢牡誘導羊との関連の上で、宦官の利用という政治技法が、どのような経緯で、いつごろ、どの地域でまず発想されたのか、という問いを立ててみたくなる。のちに指摘するように、人を去勢して、特定の用途に用いるということは、紀元前3000年紀に、すでにメソポタミアのシュメール世界で確認されている。その後アッシリア世界を通じて、アケメネス朝のペルシャでの宦官の利用は、よく知られている。しかも、たんに宮廷の宦官だけではなく、地方の軍政官としても登用されている。この制度はこうして西の地域では、キリスト教による禁止がなされた地域を除くならば、古代・中世を通じて、帝國的支配のもとで連綿と保持され、オスマン帝国の末期まで持続した。しかも、イスラム的拡大を通じて、西アフリカのソンガイ帝国にまで及んで採用されていることを見ると、その伝播力にあらためて驚かされるのである³⁾。また、中国ではすでに春秋戦国期に、その利用が認められ、以後中国の帝国支配の中で、無視できない力を発揮することになったこともよく知られている(三田村, 1963)。もちろん、このような宦官利用が、いつどこで最初に発想されたかについては、残念ながら、明らかでない。ただ、歴史的証拠からみて、その早期の発生では、中国よりも、中近東の方が古いと考えられる⁴⁾。

ともあれ、以上のようにみてくるとき、家畜管理領域と人民管理領域という、二つの異なる領域で、きわめて類似した管理技法が見いだせるということになる(表1参照)。ここで、一方が、他方のプラクティカルなアナロジーであるということも考えられる。いったいどちらの管理領域で、このような仲介者を用いた管理技法が、さきに発生したのか。このような問いに対しては、筆者はおそらく家畜管理技法としての誘導羊の利用が先にあって、それが人間領域に転用された可能性の方が高いと考えてはいるのだが、それを裏付ける歴史的資料はない。ただ、この先後の問題は、さしずめ本論で取り上げたい問題の核心ではなく、むしろ本論で注目した

表1



いのは、このような特異な管理技法が、家畜管理領域と人民管理領域という二領域にまたがって見いだせるという事実、そのものである。ここで、もしこの誘導羊の技法の分布がある一定地域に限られて存在し、かつその家畜管理技法の分布地域内で、去勢された人間の利用が最も早く発想されているとするならば、そこには、そのような管理技法を両領域で適用することを、いかにももっともと見なすような一定の視点があつた、と考えられることになる。いったいそのような視点とはどのようなものか。またこのような視点は、この誘導羊と宦官との同形性という事例に、たまたま見いだせるにすぎないものなのか。それとも、他にもそのような事例が見いだせるものなのか。

じつは本論は、このようなことを最終的に検討することになるのだが、データー蒐集を開始した時点では、この去勢牡誘導羊の技法自体が、はたしてどのような地域に分布しているかということ自体が明らかでなかったのである。牧畜民の研究は、これまでも少なからずある。なかでもいわば民族誌的な研究、また牧畜社会の研究、また牧畜民の物質文化の研究、そのような種類の記述はかなりの数に達している。にもかかわらず、まさに牧畜という生業の中核とも言える人一家畜関係行動（谷，1976a）とでも言える部分についての記載はきわめて少なく、ましてやその管理技法のひとつである去勢牡誘導羊利用技法の有無といった点について注目した記載は、きわめて少なかった。筆者はけっきょく、広域にわたって、具体的に牧民を訪ね、データーを集めるほかなく、その分布についてのほぼ間違いないであろう見取図をうるのに、かなりの年月を費やしてしまった。そしてようやく最近行った調査で確認したデーターを最終的に加えることで、いまだ十分とは云えないが、ほぼその分布の大枠を明らかにすることが出来るようになった。じつはその長い調査期間のそれぞれの段階で、中間報告を行っており、本論稿の中には、すでにそれらの中間報告で報告したデータや議論が少なからず入っている。ただその重複を顧みずここに稿を改めた理由は、本論稿をもってひとまずの総括としたいという考えにもとづいている。

というわけでまず、最近確認したデーターを含めて、去勢牡誘導羊の分布に関して確認した事実を述べることから、論を始めることにしたい。

- 1) 1987年7月初旬、ファルガムから夏営地への移動に伴ったときの目撃の記録である。
- 2) 当の夏営地は、カシミールの州都スリナガールの東方ほぼ55キロのファルガム（Pahalgam）から北上し、アルー（Aru）、そしてハリ・ガティ峠越えの後、ダチンポール（Dachinpor）川源頭部に達してのち、若干下降した地点より、バルタル（Baltal）にまでいたる、川の上半分の左右流域に点在している。その夏営地は、バッカルワラの一氏族、チョウドリ（Chawdori）・グループによって率いられている人々によって、占拠されている。
- 3) 基本的群管理の技法としては、群を先行するものと、後ろから追い立て全体の群の散開状況をチェックするものとの二人の牧夫による管理という、二人の体制がまず基本である。先行するものに対して、群は一般に追従するということを利用して、先行する牧夫は、群を引導する役割を果たし

ている。また後からついていく牧夫は、散開状況をみて、声や投石、また身体的な急迫で、遅れたり逸脱する個体を、群にもどすだけでなく、ある角度から接近することで、群全体の方向を変える。ちなみに、この特定角度からの接近によって、群全体の方向を変更する手法は、特定の音声を一定方向から発することでも効果をもつものようである。かつてアフガニスタンのバダクシャンで、夜間放牧をするカンダハリの牧夫と行を共にすることがあったが、彼は暗闇の中で、ある特定の角度から口笛を吹くことで、群を方向付けるために、筆者のようなものが余計なところにはいないよう、きわめて神経質な指示を与えたことを記憶している。このように牧夫の存在位置がもたらす効果を利用した群のコントロールの技法を、いづこの牧夫もなんらかのかたちで採用している。他に、石や、土くれを投げることで、行動をコントロールする介入技法は、いづこにも認められる。また特定の音声サインによるコントロールも、一般的にあるが、そのエラボレーションの度は、牧民によってさまざまである。そのエラボレーションの方向には二つあり、個体名を与え、それをおぼえこませて、特定個体にむけて、指示サインを発することで、特定個体をコントロールする方向と、状況に応じた反応を期待して、音声サインの指示的意味を細かく分化させる方向とがある。またいわゆる牧羊犬として知られている、訓練を受けた犬の利用も考えられるが、これは基本的技法と云うよりも、ヨーロッパを中心としたひとつのエラボレーションというべきであろう。

4) 西アフリカの王国での宦官の利用については、川田順造の教示による。

Ⅱ 誘導羊／山羊利用技法の三タイプとその地理的分布

家畜管理技法のひとつのエラボレーションと考えられる誘導羊の利用技法が、どのような地域に分布するか。この問題にはいるまえに、先に云っておきたいことが二つある。そのひとつは、この技法が、羊に関する、個々にみればさして特殊でもない、三つのプラクティカルな知識のうえにたって、それを総合する特定の視点によって成立しているということである。まず、その平凡な知識とは、次の三つである。

1 「移動する群の中で、特異的に先行する個体があるとき、追従性によって他のメンバーはそれに従う」。つまり羊/山羊の追従性についての知識。

追従性は、群居性の有蹄類に一般的にみられる特徴であり、これらの動物を狩る狩猟民でさえそれは知っている。また筆者は家畜化の過程として、仮説的にはあるが、二つの段階を想定しているのだが(谷, 1989c), その第一段階、いわゆる群の群ごとの人付けの段階があったとして、当時の人々も、とうぜん群の追従性の知識をもっていたはずである。またその基準に照らして、完全な意味で個体レベルでの人付けという第二段階の家畜化に達していないと考えられるトナカイ遊牧民も、群の追従性を大いに利用して、群をコントロールしている(葛野, 1990:20-31, 鄭, 1992:31ほか)。このように考えると、この知識は、なにも取り立てて、ある地域の牧畜民に特異的に知られた知識ではなく、この技法成立以前にすでに広く知られ、利用されていた知識であると考えられる。

2 「特定個体に名前を与え、常呼びかけ、時に餌を与えるなどして親和性を確立し、命令

語を教えて訓育するならば、その行動を、こちらの望むようにコントロールできる」。つまり動物個体を馴致し、そこで確立した親和性を介して、その個体の行動をコントロールし、利用する可能性についての知識。

馴致に関しては、もちろん狩猟民が対象とする動物は、家畜化されてない野生であるのが一般である。これらの狩猟対象の動物は馴致されていない。ただ、トナカイのオトリ狼などの場合、狩猟民は捕獲した特定個体を馴致して、それを利用している (Hatt, G., 1918:100)。また狩猟民が殺しの対象とする狩猟動物とは別に、他の動物をペットとして飼い、利用する例は少なくない。実は家畜化の起源に関して、このような狩猟民のペット飼養にその起源があるという可能性を主張するものもあるくらいで (Serpell, J., 1989:10-21)、特定動物個体の馴致にもとづく利用可能性の知識は、さほど特異な知識ではない。

3「交尾期には、牡は興奮して群の安定を損なう。そのために群の繁殖のために必要な最小の種牡を残す方がいい、必要以上の牡は去勢をするか、間引いて数を減らすのが望ましい。このような要請にもとづいて始められたと考えられるが、去勢は群管理にとって好都合であるだけでなく、家畜を従順にさせる」。こういう去勢による牡の性のコントロールとその副次効果、馴致可能性の増加に関する知識。

もちろん牡の性のコントロールに関しては、狩猟民も、牡のセレクティブ・ハンティングを行うことから知られるように、家畜化以前から知られている。自然群の中での牡の頭数比を低下させても、狩猟対象群の再生産にとってさして影響はない。このことは、家畜化以前から知られていた。ただ去勢は、歴史的には、個体レベルでの家畜化が始まって以後はじめて可能になったと考えられる。そしてこの去勢が、交尾期の群の安定に効果があるということが明らかになって、慣用化されて以後、去勢が個体の性格を従順にさせる、ということが明らかになったと考えられる。いずれにせよ、この去勢によって従順さが増すについての知識は、家畜化とともに、比較的はやい時期に知られていたはずである。

このように考えると、去勢牡誘導羊の利用技法を構成する個々の知識自体は、すくなくとも個体レベルでの人付けという家畜化の第二段階に達した牧民たちにとっては、けっして特異なものではない。ただこれらのプラクティカルな知識が個々にあるだけでは、この技法は成立しない。問題は、「命令語を理解しない、しかし追随性のある群の行動をコントロールするには、自分に特異的に馴れた個体に命令語を理解させ、その命令にしたがうようにさせれば、その個体を媒介として、間接的コントロールができる」ということを、これらの基礎的でプラクティカルな知識のうえにたって、洞察し、総合する視点がなければならない。もちろんそこには、管理者の視点というものがある。いったいこのような洞察が、どのような経緯で、思い付いたか。この点はそれなりに考察に値するが、いまここでは論じない。

ところで、さらにもう一点、データーの記載上の注意として付記しておきたいことがある。

それは、この技法の欠如に関して、その技法が知られている地域でも、群管理をめぐる労働組織のあり方によって、必ずしも採用されるとは限らないという事実である。

誘導羊の利用技法は、特定牧夫と管理される群内の特異的に選ばれた羊個体との、いわば個体レベルでのインターパーソナルな親和性にもとづいてのみ機能するものである。じつはこのような親和性にもとづいてのみ発動する管理技法である以上、管理する牧夫と管理される群との関係が、不安定で、しばしば交替するようなものでは、あまり意味がない。さきに、手のこんだイタリア中部・アブルッツオでの誘導羊の育成法についてのべたが、この地域の群管理者(牧夫)と群との関係に関して、ほぼ基本的に三つの形態があると云いうる(谷, 1977)。その一つは、1)所有者は直接群管理に従事せず、専業の牧夫に、その管理を長期契約で、委せるものである。他に、2)自ら比較的大きな群を所有しており、しかもそれを他人に委せることなく、自ら放牧群管理に従事する、いわば自己経営的な牧夫のケースである。もちろんこの両者の間には中間型があり、若干の羊を所有していながら、大所有者の群の委託を受け、その群の中に自らの所有群を混入して、放牧管理を行っているものもある。また、第二の形態に属していながら、同様の兄弟牧夫や友人牧夫と組んで、ある種の役割交替を行なって、放牧管理を行っているものもある。ともあれこれら1), 2)のケースでは、たとえ自らの所有羊をもっていなくとも、直接群の放牧管理をする特定牧夫と特定群との関係は、年を越えて長期に持続可能である。このような形態の労働組織をもつものの場合、一般に誘導羊の利用が認められた。

ところがこのイタリアの山村では、このような専業の牧夫によって管理される群以外に、3)土地をもつ小農的な家族がそれぞれ十数頭所有している羊をまとめて、夏期、上方の放牧地に日帰り放牧がおこなわれている、そのような群がある。このような群は、毎日各家に分散して夜を過ごすという点で、前者とは異なるばかりか、長距離移牧をすることなく、冬期は、当の山村の各家の柵内で越冬する、いわば定着性の高い管理を受けている。ただそれだけでなく、この日帰り放牧は、所有者の輪番によってなされており、牧夫と群との関係は、常に変わる。イタリア中部でのこの3)のケースでは、ほとんど誘導羊の利用が認められないのである。もちろんこの輪番で放牧番をする小家畜所有者のなかには、若いときに、委託契約の移牧牧夫になった経験のあるものも少なくなく、彼らは去勢牡誘導羊の技法を知っている。にもかかわらず、輪番での放牧のために、自己の誘導羊を育成することをしない。さきに述べたように、誘導羊の技法は、親和性を確立した特定の牧夫と誘導羊個体とのパーソナルな関係を基礎にしている。輪番によって、群管理者が次々に変わるのであれば、このような恒常的に確立したパーソナルな関係にもとづく技法は、採用されがたい。このようないきさつが、去勢牡誘導羊の欠如に関係しているのか。それともともと長距離移動時にも有効性を発揮するものであれば、このような比較的短距離の日帰り放牧しかない、農耕的な集団では、放牧管理上の技法が簡略化されているのか。欠如の理由としてこのような背景が考えられる。

同様の並行関係を、筆者は後に言及するアフガニスタン東北部でも見いだしている。長距離移動する牧民においてこの技法が見いだせるのに、農耕的な傾斜が強く、多くの家族の所有羊を集めて夏期放牧にきている短距離移牧をおこなう牧民集団は、同じ牧地にやってきているのにもかかわらず、この技法を知らない。

この傾向を言い換えれば、自己所有群を管理するかいなかはさておき、牧夫自身と管理する群との関係が、年を越えて長期間にわたって持続する場合には、誘導羊の利用が促進されるということである。その背景には、その技法が、いわば牧夫と特定個体とのインターパーソナルな親和性を前提としたものであるということが関与していると考えられる。

じつはこのような誘導羊の利用に關与的な労働組織上の条件の有無にたいする注目は、この技法の欠如の背景を考えるについても重要である。もしさきに云ったような労働組織上の条件が、ある調査対象に関して整っているとしよう。にもかかわらず、彼らが、この技法を知らない際には、その欠如の理由として、どの様に考えればよいだろうか。条件はそろっているにもかかわらず欠如している。とすれば、当該地域の牧民が、この技法の伝播しうる範囲のはるか外縁に位置していたということも考えられる。他に、そのような管理技法を発想ないし受け入れる文化的条件がなかった、ということが考えられる。じつはこのような事例として、さきに冒頭で示した、インド西北部のバッカルワラの事例がそれに当たる。そこでは、さきのイタリア中部での三形態の1)、2)に当たる労働組織にもとづいて、放牧管理が行われている。しかも誘導羊の利用が認められるアフガニスタン東北部の長距離移動の牧民での労働組織とほぼ同じである。にもかかわらず、この技法を知らないのである。そのことは、さらに同じくインドの西部、ラジャスタンの牧民についても同様にいえ、彼らもこの技法を知らない。労働条件の記載は、当の技法の欠如の背景を考えるのに、ある種の推論材料を提供する。

というわけで、以下のデーターの提示に際して、筆者は、牧夫個人と群内特定個体との親和性の確立と維持にかかわる労働組織上の条件がどのようなものであるかを示すようなコメントを、データーの提示に際して付記した。

1 去勢牡による誘導

先にも触れたように、インドのカシミールの夏営地にやって来るバッカルワラやカシミリのもとでは、去勢牡誘導羊の利用は知られていない。それにたいして地中海地域中部、イタリアのアブルッツォの移牧をおこなう牧夫のもとで、それは明らかに用いられていた。ではこの間の地域で、誘導羊の技法はどのような分布を示すだろうか。じつはこういう視点から、牧民のもとを訪ね、資料を収集するあいだに、筆者は去勢牡とは異なるタイプの誘導羊の技法を見いだすことになった。そのため章題は誘導羊／山羊の3タイプということになったが、まずもともと取り上げることにした、去勢牡誘導羊の利用分布のデーターから提示することにする。し

かも資料収集の順序とは無関係に、以下イタリアから東に向けて順序だててそれを述べることにする。

まず、ギリシャのイピロスおよびテッサリアのサラカッチャニは、明らかに去勢牡の誘導羊を用いていることが明らかになった(調査:1980年夏, 82年夏, 92年冬)。彼らはそれを、クリアリ・ギッセミア(*kliari ghissemia*)と呼ぶ。二才以上の種牡候補の中から特定個体選ばれて、去勢される。そして固有名を与えて、訓育を施す。300余頭の群の中には、2~3頭のクリアリ・ギッセミアがいる。要は、成牡として現に誘導羊として用いられているもの以外に、もう少し若い次代の誘導羊をも、すでに育成しているということなのである(Campbell, 1984:19, Tani, Y., 1982:14, 1987:20)。

ちなみに、サラカッチャニは、大きな自己所有群を管理する専門の牧畜民集団である。彼らは、この自己の群をつれて家族ごと低地と山地との間を季節的に移動している。この点で、放牧管理者とこの去勢牡誘導羊とのパーソナルな関係は恒常的に保たれており、誘導羊の技法を採用しうる条件を備えている。

ところで、ギリシャのテッサリアの地域には、サラカッチャニのほかに、ヴラッヒおよびアロマンニという牧民集団がいる。彼らも去勢牡の誘導羊を利用していた(調査:1980年夏, 82年夏)。

ギリシャ島嶼部のクレタにおいて、同様に去勢牡が養成され利用されている(Tani, Y., 1989a:189)。そこではときに、去勢牡の羊が山羊に代わることもある。毎年牧夫は、生後二・三カ月の牡を4・5頭去勢する。イタリアでみたようなエラボレートされた訓育法は確立してないようであるが、名前を与えて、呼び掛けに応えるようにしている。彼らもこの去勢誘導牡を大事にし、盗まれたときには、復讐の原因となると牧夫は語った。

ところでここで、ルーマニアにおいても調査を行ったので、バルカン半島を北上して、その地域の去勢牡誘導羊の利用について述べるのもひとつであるが、分布についての概観をより容易にのみこんでもらうために、視点を水平に東に移動させることにして、トルコについてつぎにのべる。

トルコの調査では、松原のトルコ系のヨルック遊牧民の詳しい調査記録があり、それによって、去勢牡誘導羊の利用は、なんら認められないことが、報告されている(松原毅, 1983:51)。もちろんこのヨルックは中世末にトルコに移動してきたチュルク系の牧民であり、彼らの誘導羊欠如の理由に関しては、もともと中央アジアに本拠をもっていたトルコ系の人々が、この技法を知らなかったということも勘案されなければならない。ただこの点については、後に中央アジアでのトルコ系の人々に関するデータを示すところで論ずる。

さて、このトルコ系の牧民の地域を越えて、イラン系のクルドの遊牧民の地域にはいると、この技法が再び見いだせることになる。トルコ東南部、ハッカリ近傍の遊牧民から聞込みを行

ったが、彼らは去勢牡誘導羊を利用しているという。また時に羊ではなく、山羊を養成して、それに充てることもあるという。群の中に一般に一頭だけ入れるとも言った (Tani, Y., 1989 a : 189)。長期の滞在が許されず、聞込みによる確認にとどまったが、彼らは、イタリアでの養成法とほとんど同じ方法で養成するといった。

イランでは、バクチアリを調査したディガールが、去勢牡誘導羊の利用について報告している (Digard, J-P., 1981 : 57-8)。地域はマスジッド・スレイマンから東の山地の事例である。筆者も当地を訪れてそれを確認することができた (調査 : 1992年2月) が、彼らは一般に、羊の群に若干の山羊を入れている。山羊は一般に、行動が迅速で、牧夫の介入に速やかに反応するために、たとえ去勢し、訓練を与えてなくとも、羊群の中に入れることはよく行われている。ここでもそれは例外ではなく、一群中に4—5頭入れるのが一般であった。このような山羊の子の一頭を、牧夫は生後一年目の冬に、去勢して一ヶ月あまり訓練を与える。その訓練法は観察できていないが、棒を使って、声を発して、命令語を教え込むということであった。彼らはこの去勢牡誘導山羊を *sehis*、また羊を *dobor* と呼ぶ。そして、その説明のさいに、要はそれはドボール・ジェロロ (*dobor jeroro*) なのだ、とも云った。ガイド用の羊という意味だということである。

ここで季節移動をする牧夫は、一般に自己の所有する群を管理している自己経営の牧夫か、群所有者から長期契約で放牧委託を行う雇われ牧夫かのどちらかであった。彼らは、長期にわたって群との関係を恒常的に維持できるものであり、去勢牡誘導羊の育成に関して、条件をそろえているものだということができる。

さらに東に視点を移し、アフガニスタン東北部、バダクシャン・シェワ高地に夏季放牧にやって来る、いくつかの民族を異にする牧民集団について、ルーマニア、ギリシャ、トルコなどを訪ねる以前に、すでに調査を行っていた (1978)。対象にされた牧民集団は1) ドウラニ系パシュトンのカンダハリ、2) アラビ、3) ウズベッキ、そして4) 山岳タジックのシャグナニとの4集団であった (調査結果の概要は Tani, Y., & Matsui, K., 1980, 及び松井 健, 1980)。これら四集団中、最初の三グループは長距離の季節的移動を行う遊牧的な牧畜民である。最後のシャグナニはパミール川流域の灌漑村落を居住地とする定着農民であり、短距離の季節的移牧をする牧夫が、村内の各家族の羊をまとめて夏営地に連れてきていた。

興味深いことに、この前三者は、一群3—400頭の群を管理するのに、キャンプ地で、その群をなんらかの囲いの中に入れることはいっさいしない。しかも、パシュトン遊牧民は、夏営地で夜間放牧を行う。その夜間放牧中の群介入の方法は、配慮された接近と先頭での方向付けと言う、バスキンの記述した初期的な放牧群コントロール (Tani, Y., & Matsui, K., 1980, 及び松井 健, 1980, Baskin, L. M., 1974 : 530) を想起させるやり方でなされる。暗闇の中、ガレ状の斜面をゆっくり上って行く群にむけて、一定の方向から低い口笛やかすかな呼掛け音を立てて誘

導する。そして、夜半すぎになって、山腹で群をまとめて仮眠する。このときもちろん、群を囲うことはしない。そして数時間仮眠したのち、キャンプ地にゆっくり戻って来る。こうして昼間、群はキャンプ地近傍で、囲われることもなく、回遊と昼寝とを繰り返す。そして、夕刻の搾乳時になると、牧夫は、ループ状の輪がたくさんついたロープを、ある一定の高さに張って羊をつなぎ止め、搾乳する。そして陽が沈む頃に、再び夜間放牧に赴く。

このようなことを毎日繰り返しているわけだが、朝、夜間放牧を終えて山を降りてきたあと、群がキャンプ地の周辺を、牧夫のアテンドもないのに、ゆっくりと群をなして回遊している様子は、きわめてのんびりとした光景である。ときに小高い丘の斜面にまとまって座って、仮眠をし、再び目覚めて歩き出す。キャンプ地にはいくつかのテント集団があり、そのそれぞれの群が複数、このキャンプ地には認められる。そのために、回遊中の群が、相互に近づくことがある。にもかかわらず、それらは相互に交わり、混じりあうということはない。しかも物理的なつなぎ止めをしなくとも、群が、牧夫たちのいるキャンプ地から離れていくこともなく、見えない群と人とのつながりが、家畜化された群では成立していることを、この事実は示している。搾乳時以外は、このように群を物理的につなぎ止めて囲ったりしない事例は、地中海地域では少なくなるものの、中近東ではけっして珍しいことではない¹⁾。このことは、群相互の混入が認められないということとともに、じつは家畜化の起源を考察するに際して、注意しておくべき重要な事実であると筆者は考えているが、ここでは特に触れない。

むしろここでは、この事実を、おなじくこのシェワ高地に夏営地をもとめてやってきているもうひとつの牧民集団、シャグナニとの対比で言及しておきたい。というのは、このシャグナニは、石づみの夏営小屋に接したかたちで、石垣の囲いを築き、そのなかに群をいれて、夜を過ごさせる。シャグナニは、うえにも指摘しておいたように、この高地のすぐ下の、パミール川にそった灌漑農地を母村として、いわば定着的な有畜農耕を行っている人々である。そしてこれらの農家の所有する少数の羊をまとめて、短距離移動の移牧をおこなっている人々によって、群は管理されている。遊牧的な前三者が、群を囲わないのに対して、短距離移牧をおこなう定着的な有畜農民の牧夫は群を囲う。このような顕著な対比と並行関係にあるかのように、去勢牡の利用の有無に関しても、前三者は去勢牡による誘導の技法を採用しているのに対して、シャグナニはこのような誘導技法を利用しないのである。

ただ、この前三者について、ひとつだけコメントを付しておかなくてはならない。というのは、去勢牡誘導技法を利用していながら、かれらは、地中海地域の去勢牡誘導羊利用者と異なり、牡羊のかわりに、牡山羊を去勢して、誘導用に用いている。アラビは一歳の牡山羊を去勢する。彼らは、この誘導山羊は、十年間は利用可能であるとも言った。アラビとウズベッキは、これを *sarkha* と呼ぶのに対して、パシュトンではそれを *mukhi* と呼ぶ。この誘導山羊は、群所有者によって市で購入された若牡を去勢することによってつくりだされる(観察の結果について、同行

した松井の報告書、松井1980:26、に一部記載がある)。

ところでこれら前三者についてだが、群管理する牧夫は、群所有者から長期契約によって群管理を任された雇われ牧夫である。このため、牧夫と誘導山羊との間には、恒常的にインターパーソナルな関係が成立している。このような恒常性にもとづいてか、この誘導山羊には、固有名が与えられる。

さて、さらに東に視点を移動させたとき、この誘導羊／山羊の技法はどこまで及ぶのか。インドでもその利用は認められるのか。この点の確認が求められた。

インド西北部、カシミール(調査1987年、89年夏)には、さきに冒頭で言及したグジャール・バッカルワラ(Bakkarwala)と云う、おもに山羊飼いを中心とした長距離の季節移動をする人々が、夏営地を求めてやって来る。また、カシミールの低地の有畜農民が所有する羊を、委託を受けて、短距離移牧するカシミリ(Kashimiri)という人々も、この地域の山間部にやってくる。両者において共通し、かつこれまでみてきた牧民の群管理と比較して、顕著な特徴として気付くことは、彼らがいずれも、地中海地域にみられるような頻度では、放牧時に群れに介入することをしない、ということである。朝、キャンプ地から群を追立てて、出発させた後は、自分はキャンプ地に戻って、群を勝手にゆくにまかせ、ときに遠くから群の動静をみて、必要があると思われたときにのみ、石を投げたり、追立てたりして介入する。群介入ないし誘導と云うことに、かれらはあまり熱心ではないかに見えるのである。いったいこのような、群介入に対する関心、ないし顧慮と云う点での差が、どのようなところから生じているのか。この点について推測を加えること(谷, 1991: pp. 266)はここでしない。ただ、朝キャンプ地から群を出発させた後、殆ど群れに介入せず放置しておく点は、有畜農村での牛の日帰り放牧に於て見いだされる放牧の仕方とよくにている。このような有畜農村の牛の日帰り放牧のパターンが、モデルとしてあって、このような介入頻度の低い群管理が認められるのかと思ったことがある。

ところで、バッカルワラもカシミリも、誘導羊ないし誘導山羊の利用の証拠はまったく見いだすことはできなかった。彼らは、このような誘導羊の利用テクニックについて話すと、そういうものを利用するならば、おそらく放牧上便利だろうという感想を漏らしたにすぎない。

バッカルワラの場合、群所有者が放牧管理には関与せず、比較的長期に雇用する牧夫(goalまたはajuli)に群放牧をまかしている。その点で、アフガニスタンのパシュトンのケースと同じである。牧夫と群との間には恒常的な関係が見いだされるわけで、労働組織の観点からすると、誘導羊を利用する条件はそろっている。にもかかわらず、彼らはその技法を知らないのである。とすれば、彼らのもとでの誘導羊の欠如は、その利用を可能にする労働組織上の条件の欠如に根ざしたものではないだろうということになる。誘導羊の技法の起源地から遠く、その伝播域の外に位置するためであり、いわばこの技法の分布限界がインド西部以西にあることを示唆するためであるのか。このあたりをさらに確認するために、筆者は、インド西南部のラジ

ャスタンで、さらに調査を行った(1987年夏)。

調査は、まずピカネールから北方ほぼ10キロのショバサル村を母村にしている長距離移牧集団においてなされた。ところで、彼らはいっさいこの誘導用の去勢牡というものを知らなかった。またジャイプール南東のカロリ村周辺で放牧を行っているマルワリの遊牧民集団についてなされたが、彼らは大きな羊群を所有し、恒常的な牧夫を雇用して、放牧管理を彼に任せている。にもかかわらず、ここでも去勢牡の誘導羊の利用は認められない(Tani, Y., 1985: pp. 78-84 & 1987: pp. 81-94)。また、ジャイプールから東方40キロの地点で、同じくマルワリの遊牧民集団について調査できた(1992年)が、ここでも去勢牡誘導羊の利用は認められなかった。ただ、興味あることとして、ここでは種牡用の牡が、毛色パターンにしたがった分類名称をもって常と呼ばれることで、呼掛けに応ずるようになっていく個体の存在を確認できた。それは、特に出発時に呼ぶことによって、群の始動をするように仕立てられていた。この事実は注目しておくに値する。

さらに視野を広げて、チベット系の牧民の事例として、ラダックの短距離移牧によって、高地で夏期放牧をする人々のもとでも、聞込みを行うことができた(1985年)。そこでは特定の委託牧夫が、ザンスカール川に沿った下流域の低地の農村の所有する羊・山羊を集めて、夏期放牧を行っている。牧夫は村内の専門の牧夫であり、自己の羊・山羊をも所有してその群の中にいれている。この所有家畜の中から、望むならば親和性を確立して、誘導羊を育成する条件はそろっている。にもかかわらず、そこでも誘導羊の利用は認められなかった(Tani, Y. 1985: pp. 84-88)。また松原が、チベット高原の中央部アムド・ドマ(1985年)およびカイラス近傍(1988年)の牧民について、聞込みを行ったデータによれば、ここでも誘導羊の利用はいっさい認められないということである。

このようにみえてくると、インド西部には、去勢牡誘導羊の技法は、採用されていないということになる。起源中心から遠いためか、それともそのような技法を受け入れるなんらかの歴史的、文化的条件がそこにはないということか。

ともあれ、地中海地域から東へ水平移動して、全体を眺めるとき、イランのバクチアリやアフガニスタンのパシュトゥーで見たように、羊から山羊へと誘導役を担うものが変わること、またその育成法に関してイタリアで見たようなエラボレーションが見られないという変化はさておくとすると、去勢牡誘導羊の技法は、アフガニスタン西北部辺りまでは認められ、それより東、インド西部にまでは達していないということになる。

ところで、さきに触れたようにトルコのトルコ系ヨルック遊牧民が、この東西に延びる去勢誘導羊の分布帯の中で、例外的にそれを欠如していた。彼らはほぼ中世末に、中央アジアからトルコのアナトリア高原に移動してきたトルコ系の遊牧民であるとして、この技法欠如の理由に、まさにトルコ系の牧民がそれを知らなかったという可能性が考えられる。この点に関連し

て、最近松原のおこなった新疆省北部アルタイ山脈南部のトルコ系の牧民の調査から、去勢牡誘導羊の利用は見いだされないということが明らかにされている（松原毅，1991年）。また小長谷は、内蒙古のシリンホト北西方，シリングル盟アバハナル旗の牧民の詳細な調査を行った（1988年）が、ここでもその技法は欠如しているということであった。

ところで、地中海地域から、これまで視点を東に移動させたが、つぎにバルカン半島を北に移動させてルーマニアで調査をこころみた、その結果を記す。

ルーマニアのカルパチア山地には、その山麓で農耕を営んでいる村から、短距離移牧であるが、夏期移牧にやって来る牧民たちがいる。筆者はそこで、次の三地域で牧畜管理についてのデーターを集めることができた（1978, 80, 82年）。その三地域は1）黒海の西岸域，ドブロジャ地方（おもに Topalu），2）南カルパチアのシビウ県内（おもに Tilișca），そして3）北カルパチアのビストリッツァ・ナサウード県内（おもにビストリッツァ県では Ardan, Șebis, Sieut, そしてナサウード県では Telciu）であった（調査結果の概要は Tani, Y., 1980, 1982, & 1987参照）。

そのうち、ルーマニア南部のドブロジャでは、去勢牡誘導羊が放牧管理に利用されており、バタール（batal）と呼ばれている。牧夫は、将来バタール候補と目されている選ばれた牡の小羊を、寝るとき枕のようにして身を寄せ、親密な関係が成立することに努めるという。春、その小羊が一歳ないし二歳になったとき、それを去勢する。そのとき固有名が与えられ、牧夫は常にその名で呼びかける。しばしばキャンプ地から出かけるときなどにママリーガ（mămăligă＝ボイルしたとうもろこしの粉の玉。牧夫にとってはこれが常食である）をあたえ、まず先頭を切って先導する牧夫につき従うようにする。また名を呼び、そのときに音声命令を発して、状況に応じた反応をするようにする。またこの去勢牡誘導羊の容貌をよくするために、熱いママリーガを角に巻き付け、そのカーヴを矯正しさえする。

牧夫達は、このバタールを、群のなかに一頭だけ入れるという。しかし実際現場の群のなかでバタールを指示させると、そこには三・四頭いることが少なくない。もちろんこのなかには、若誘導羊も入っており、次世代のためであると考えられる。

このドブロジャ地方は、社会主義革命の後の集団化政策で、当時自立の牧畜経営者はいなかった。このトパルの牧夫は、集団農場所有の群を管理するものであったが、群に対して牧夫は個人的に定まっており、パーソナルな関係が、この誘導羊と牧夫の間に成立しうる条件がそろっている。

次にシビウ県のいわばルーマニア中部、ティリシュカを中心としたいく村かの夏営地で同様の管理技法についての聞き取りを行ったが、ドブロジャと同様、去勢牡誘導羊の利用が認められた。彼らは、ドブロジャと同じく、それをバタールと呼んでいる。観察したすべての群に認められるというわけではないが、このバタールの利用が認められた。牧夫は、大きな群にのみそれを入れていたが、一般に群に一頭だけ入れるものだといった。固有名が与えられるが、その

名は人につけられる名前と変わらない。

この地域の牧夫は、山麓の定着農村に居住するものであり、自らが所有している羊をたがいにとめあい、専業で季節的な移動放牧を行っている人々である。牧夫は八人で一組をなし、その半分、四人づつが交代してかわるがわる群管理をしている。その交代期間は、ほぼ一週間である。自己所有の群の中に、このような去勢牡を誘導羊として育成するものがあり、自己の番に当たるとき、それを利用している。

ところが、ルーマニアをさらに北上し、ビストリッツァ・ナサウド県で四カ所の夏営地で調査をしたが、そのいずれにおいてもこのバタールの利用は完全に消滅するのである。

じつは、この去勢牡誘導羊に与えられるバタールという語は、ハセデウの語源辞典(Hasedeu, B. P., 1974)によると、ギリシャ語の *βαταλος* という語から派生したものであるとされている。それは単に「去勢牡」を意味する。シビウ周辺の牧民達は、社会主義革命が行われて、ある種の県外移動制限されるまでは、ドブロジャまで季節的に移動していたといわれる。またドブロジャには、かってからギリシャの商人がしばしば乳製品を仕入れにきていたという。また古くから、ルーマニア系の牧民(アロマンニ)がユーゴスラヴィアやギリシャ北部には広く分布しており、これらの地域とはけっして無関係ではなかった。このような関係ルートを介して、比較的新しい時代にギリシャから導入されたのかも知れない。ルーマニア南部の去勢誘導羊の呼び名が、バタールという、ギリシャ語に由来すること、またルーマニア北部にゆくと消滅するという事実を勘案すると、どうやらこの去勢牡誘導羊の技法は、この地域ではもともと南の地中海地域に分布していたものと見てよいと云うことになりそうである。しかも中央アジアのトルコ系の牧民には採用されていないということをも加えて考えると、去勢牡誘導羊(山羊)の利用技法は、もともとユーラシア西南部、地中海地域から中近東にかけて東西に延びる帯を中心に分布した技法であるといつてよいことになる。

以上、去勢牡誘導羊の地理的分布を明らかにする調査データを述べ、その分布域をほぼ示したが、この調査の間に、去勢牡誘導羊とは別のタイプの、ある種の誘導羊に出会うことになった。そこで次に、それらのタイプについて、その分布を述べることにする。

2 複数雌による群誘導

さきにルーマニア北部、ビストリッツァ・ナサウド県では去勢牡誘導羊は見いだされないといった。ではこの地域には、特異的に牧夫と命令・服従関係を確立した個体を介した、群行動をコントロールする技法はいっさいないのか。筆者は、この地を訪れて、まずイタリアでの去勢牡誘導羊の育成方法などを説明して、「あなたがたのもとでは、このような誘導羊といったものがあるか」、ということを尋ねた。それにたいして、彼らはその技法の存在については知ってはいたが、その利用を否定すると同時に、それとはまったく別種の群リーダーとでも云う

べきものがあると答えたのであった。彼らはそれをフルンターシャ (frunțașă) と呼ぶといった。そして、このフルンターシャは雌であり、牧夫はそれと特異的な親和性を確立することで、群行動をコントロールすることに利用していることを知らされたのであった（調査概要は Tani, Y, 1980, 1982, 1989 a 参照）。

じつはこのような技法についての記述は、あらかじめ参照したルーマニアの牧民についての民俗誌にはまったく記載されてなかった。いや民俗誌のほとんどは、季節移動パターンや小屋の形態、乳加工工程などについては詳しく記載してあっても、このような群管理技法についてはほとんど注意を向けていないのが一般であった。しかも、このルーマニア北部の地域を訪ねたのは、イタリア及びアフガニスタンの調査を行った後で、このいずれの調査地でも、このような雌のリーダーなどと云うものの存在については、知らされていなかった。それだけに、去勢牡誘導羊の欠如はさておくとして、まったく異なる雌の誘導リーダーが存在すると云う事実は、一種の驚きであった。

ルーマニア北部で、最初このフルンターシャという雌の誘導羊の存在を知ったのは、ルーマニア・ビストリッツァ県での調査村のひとつ、アルダン (Ardan) で、夏営地を訪ねたときであった (1978年)。そのとき牧夫は、フルンターシャという先をゆく個体がいるということを語ると同時に、群からいつも遅れるコダーシャ (codașă) と云う個体がいるということ、次のように語った。つまり、「フルンターシャは群の先頭を行く、群の導き手 (conductor) だ。それに対して、いつも遅れる奴をコダーシャ (codașă) という」と。コード、それは末尾を意味する。つまり、コダーシャは遅れる傾向のあるものを指す。それに対してのフルンターシャ、つまりフロント (先頭) を行くものだとなれば、それは先頭をいく傾向のあるものということになる。言い換えれば、フルンターシャとは生得的に群の先頭をいく傾向のある個体で、牧夫はそのような個体をマークし、それに命令語を憶えさせたりして、群をコントロールするのに用いているのかもしれない。筆者は当初このように理解した。

そして、そのような理解のもとで、具体的にどの個体がそれに当たるかを知ろうとして、「ではこの群のなかで、どれが当の先頭を行く雌のコンダクターであるか」と質問した。その問いに対して、意外なことに牧夫は、前にいる群の中から、「これとこれとこれ」と、けっきょく 7—8 頭あまりもの個体を指示したのである。フルンターシャが、群の中で生得的に先頭をゆく傾向があるリーダー的な存在であるとするとして、もし一群の中にこれほど多くの先導者がいるとすれば、いったい追従性のある群は、どのリーダーの後をフォローするというのだろうか。リーダーは一頭であることが好ましいはずだ。いったいこのようなリーダーの複数制のもとで、群はスムーズに移動するのだろうか。

夏営地での群は、八人の牧夫が、自己の所有する羊を寄せ集めて形成されている。そしてそのうち四人が組をなして、一週間毎の放牧組を形成する。かれらの指示がいかににも意外であり、

理解不可能なものであっただけに、筆者はそこで、そこにいるもう一人の牧夫に、同様の質問をして、事実を問いただすことにした。すると、かれは、今度は十頭いると答えた。ついでもう一人の牧夫に尋ねると、今度は十数頭いると答えたのである。リーダが複数いるということもさることながら、牧夫によって、数が異なる。これらの回答は当初、筆者をさらに当惑させることとなった。こうして、いわゆるフルンターシャの複数性、そして牧夫に応じて数が異なるということの背景の追及が始まったのであった。

その追及の結果については、次節の誘導羊の機能を語る部分に先送りにすることとして、当時教えられたそのフルンターシャの育成方法について記しておく。というのも、たとえ当のフルンターシャが生得的に先頭をゆく性質をもっていたとしても、牧夫がそれと特異的に親和生を確立し、名を呼んでそれに応えるようになっていなければ、群をコントロールすることはできない。このように考えて育成方法を尋ねたのである。

かれらは、毎年、冬に生まれ出る小羊のなかから、特定の雌個体を選んでマークし、名を与えて呼び、しかもママリーガを毎朝与えて、手なづける。このマークされた雌が、自分の名を憶え、近づいてくるようになると、特定の口笛音を発して、その音に従ってやってくるようにする、というのである。もちろんこの場合、名前と云って、身体の色・模様に応じて定められた分類名称(Tani, Y., 1980: pp. 82-84)が用いられており、この点はイタリアなどで去勢牡に対して与えていたような、なかば擬人化された固有名ではない。いわば個体識別のために用いられている分類基準にそって指定されている分類的な記述名称が、個体を特異的に呼ぶ呼称として用いられているというのである。もちろん群の中には、例えば「目の周りが黒い」という身体特徴をもつために、〈オアーチシャ oacişe〉と云う分類のタームで記述される個体が複数いるということは稀ではない。それを、特定個体の呼称としたのでは、個体指定ができないという気もしないではないが、要は呼び名をもって応答することが期待され、その名を呼ばれて応答するように訓育されているものが、「目の周りが黒い」特徴をもつものの中に一頭しかいないようにして、常に同じ呼びかけに対して、特定の一個体のみが応ずるようにしておきさえすれば、応答上の混同が起きることはない。他の同じ身体特徴をもつ同類は、たとえそれに応じた名を呼ばれても、普段それで呼びかけられることはないわけだから、注意喚起されるわけがないだけの話である。ともあれこのような呼称のあたえ方の中には、ジェネラーレといった、呼称の与え手の側の思い入れはなんら認めることはできない。

ルーマニア北部でも、労働組織は、南カルパティアと変わりなく、ここでも村の中の専業牧夫たちが、自らが所有する羊を、まとめて一群となし、一週間交代で放牧管理をするものである。もし当番の際に、自己の所有群のなかであらかじめ育成しているフルンターシャを、それぞれの牧夫が用いるのであれば、この輪番制は問題とならない。牧夫とこの雌の誘導羊たちとのパーソナルな関係は恒常的に維持される以上、このような技法は十分機能するというわけ

である。

さて、先の先頭を切るものが複数いるといったことから生ずる疑問はさておくとして、このような複数雌を利用した群コントロールの技法は、このルーマニア北部以外、どの地域に分布しているのか。

北カルパチアにおいて利用されていることを知ったのち、ルーマニア南部で調査をした筆者は、去勢牡誘導雌羊とともに、フルンターシャの利用技法が、このルーマニア南部でも用いられていることを知ったのである。ただ名称が異なっていた。シビウ県のティリシュカの牧夫たちは、この雌の誘導羊をクルマーチェ（*cirmace*）と呼んでいた。それは、「追隨されるもの」を意味する。その養成の仕方は、北カルパチアとおなじであった。

しかもこのフルンターシャ・タイプの誘導羊の利用分布は、それ以後の調査で、さらに南下し、ルーマニア語を話すアロマンニとよばれ、テッサリアなどギリシャの北部に分布する人々のもとでも等しく利用されていることを知った。ではルーマニア北部よりもさらに北にいて、国境を越えた旧ソ連領の地域ではどうか。じつはこの点は、当時なお訪れることが不可能であった、その有無は確認されていない。

ともあれこのように見てくると、ルーマニア南部では、さきに述べたようにバタールという去勢牡に加えて、フルンターシャ・タイプの誘導羊がいるということになる。つまり異なるタイプの二種類の誘導羊が、同時並行して用いられているということである。いったいなぜこのような二種の技法が併存しているのだろうか。もし両者が、同じ役割を果たすとすれば、おそらく事後的に南から伝播してきたであろう去勢牡誘導羊の技法を受け入れる要はないはずである。この併用の事実、この両者の間での機能、ないし状況に応じた用いられ方の差異を予想させるものであった。その差異については、次節の誘導羊の機能を論ずるところで語ることにして、つぎにじつはギリシャで見いだした、去勢牡誘導羊でもなく、複数雌誘導羊でもない、いわば第三の誘導羊のタイプと云うものについて述べることにする。

3 雌雄両性型誘導

第三のタイプとの出会いは、ルーマニアでの調査の後に行なった、ギリシャはイピロスのサラカッチャニを訪ねたときのことであった（調査概要は、Tani, Y, 1980, 1982, 1989 a 参照）。サラカッチャニの牧夫は、すでに去勢牡誘導羊の分布を述べたところで指摘していたように、クリアリ・ギッセミアという去勢牡誘導羊を利用していた。ところが、彼らは、それとは別に、さらにマナリ（*manari*=牡）とマナラ（*manara*=雌）という語で指定される、さらに別種の誘導羊を利用していたのである。

朝キャンプ地を出るとき、また夕刻キャンプ地に帰るとき、このマナリやマナラは、牧夫から、手にのせた麦を与えられる。出発時は、出かけようとする牧夫が、出かける方向に向かっ

て歩き始めたところで、これらに餌を与えることにしているため、このマナリやマナラはかならず呼び声に応じて出てくる。また帰りつくと必ず餌を与えるために、夕刻キャンプ地に近づくと、ふたたび餌を求めて、このマナリやマナラは先頭を切って戻ってくるといった具合なのである。追従性のある群は、こうして、朝も、夕も、このマナリやマナラの後を追ことになり、結果として、牧夫に都合のよいスムーズな移動の流れが実現されるわけである。

このマナリやマナラを養成するのに、牧夫はまず子が生まれてから間もない時期に、当歳子のなかから牡でもよい、雌でもよい、特定個体を選び出す。そしてそれを牧夫の小屋に囲い、あたかも小犬を飼うように親しく世話をして、親和性を生じさせる。しかも、母雌から乳を飲ませる代わりに、牧夫の家族員の手から哺乳瓶で搾りおいた乳を飲ませるのである。現在では、人の幼児用のガラスの哺乳瓶を用いるが、おそらくかつては皮製の哺乳袋などを用いたに違いない。ギリシャでは確認することができてないが、スイスには、出産後母親をなくした小羊のために、人為的に哺乳するための吸い口のついた木製の容器があるのを確認している(小林茂樹, 1990:18)。ところで、離乳後、やはり牧夫はみづからの手で麦を与える。こうして牧夫との親和性が確立してのち、名前を与えて、呼べば応えるように仕込むという。

このマナリ・マナラ・タイプの誘導羊の利用は、ギリシャでは、さらにクレタでも認められた。

このサラカッチャニ及びクレタの雌雄両用の誘導羊は、ルーマニアのフルンターシャとは区別されるべきであろう。というのも、ルーマニアでのフルンターシャ・タイプは、専ら雌に限られているのに対して、ギリシャのマナリ・マナラ・タイプは性にこだわらずに、要は幼い時期にペットのようにして飼うことで成立する親和性に頼っている。最初にあげた去勢牡誘導羊と区別するために、以下もっぱら雌からなるフルンターシャ・タイプを複数雌誘導羊と呼び、マナリ・マナラ・タイプを雌雄両性型誘導羊と呼ぶことにする。

以上、ややデータの提示が長くなったが、誘導羊には三つのタイプが少なくとも存在することが明らかになった。そのそれぞれの分布に関して、去勢牡誘導羊(山羊)については、すでにその分布域を述べたのだったが、地中海地域から中近東にかけて東西に帯状をなして分布している。そしてそれはアフガニスタンにまで及んでいるが、インドのラジャスタンにまでは及ばない。第二の複数雌誘導羊利用は、さきに述べたルーマニアの南部から北部にかけておもに分布しており、かつギリシャ北部のルーマニア系の牧民アロマンニのもとにまで分布している。他方、第三の雌雄両性型誘導羊は、サラカッチャニ及びクレタで先ず見いだされたのだが、興味深いことにその後(1992年)、きわめてかけ離れた地域ではあるが、インド西部、ラジャスタンでの調査の際、ジャイプールから東40キロの地点でおとづれたマールワリの牧民のもとで、調査した四集団のうちのひとつの集団の中で、見いだすことができたのであった。彼らはこの

図2 誘導羊／山羊技法についてのデーター蒐集地点(*印は谷 泰調査分)



- | | |
|--|---|
| 1. Nevache, Hautes Alpes, France, by Delamarre, M. J. B. | *16. Durrani Pashtun, Badakhshan, Afghanistan, 1978 |
| *2. Abruzzo, Central, Italy, 1970 | *17. Uzbeki, Badakhshan, Afghanistan, 1978 |
| 3. Sardegna, Italy, by Ledda, G.. | *18. Arabi, Badakhshan, Afghanistan, 1972 |
| *4. Sarakatchani, Ipiros, Greece, 1978 | *19. Tajik Shagni, Badakhshan, Afghanistan, 1978 |
| *5. Sarakatchani, Thessalia, Greece, 1980 | *20. Bakkarwala, Jammu, India, 1987 |
| *6. Vlach, Thessalia, Greece, 1980 | *21. Kashmiri, Kashmir, India, 1987 |
| *7. Aromanni, Thessalia, Greece, 1980 | *22. Tibetan, Zanskar, Ladakh, India, 1985 |
| *8. Crete, Greece, 1982 | *23. Malwari, Bikaner, Rajasthan, India, 1987 |
| *9. Ardan, Bistrița-Nasaud, Roumania, 1978 | *24. Malwari, Karoli, Jaipur, India, 1989 |
| *10. Șebis, Bistrița-Nasaud, Roumania, 1980 | *25. Malwari, East of Jaipur, India, 1992 |
| *11. Tilișca, Sibiu, Roumania, 1982 | 26. Amdo Doma, Tibet, 1985 by M. Matsubara |
| *12. Topalu, Constanța, Roumania, 1980 | 27. East of Kangtissu Shan, Tibet, 1988 by M. Matsubara |
| 13. Yöluk, Burdur, Turkey, 1979 by M. Matsubara | 28. South of Altai Mountain Range, Shinkyan, 1990 by M. Matsubara |
| *14. Kurd, Hakkari, Turkey, 1980 | 29. Silin Hoto, Mongolia, 1987 by Y. Konagaya |
| *15. Baxtyâri, Maszid Soleyman, Iran, 1992 | |

図3 誘導羊／山羊の諸タイプの分布



- 凡 例
- ★ 訓練されてない山羊の混入
 - ☆ 訓練されてない種羊への注目
 - 雌雄両性タイプ（非去勢、幼時期よりの餌づけ）
 - 複数雌タイプ（訓練、雌集中）
 - △ 去勢牡タイプ（去勢、牡集中）（▲山羊 △羊）
 - × 群誘導技法欠如

ような個体に対する特定の名称をもっているわけではなかったが、幼いときから親和性を確立し、呼べばやってくるように仕立てていた。そして朝などの出発時にその個体を呼ぶことで、群に始動を与えるのに用いていた。このような飛び地のようなジャイプールでの事例がなにを意味するのか。かつてはこの雌雄両性型の誘導羊の利用が、広く中近東でも認められたのだが、去勢牡誘導羊の技法が普及することによって消滅した。ただ、この去勢牡誘導羊の技法がインド西部までは伝播しなかったために、古い形態がこの地域には残存している、ということなのか。あるいは、まったく自然発生的にここでも成立したものなのか。今のところ、この問いに対してはなにも語ることができない。

いじょう、去勢牡誘導羊からはじめて、その後新たに見いだされた誘導羊の二つのタイプを加えて、特異的に群管理者との親和性をもった群内個体の行動をコントロールすることで、追従性のある群全体をコントロールする技法として、三つのタイプの存在が指摘され、その地理的分布がほぼ示された(図2、3参照)。

もちろんここで、これらの例にみられるような、明らかになんらかの親和性の創出なしに、人の介入に敏感に反応するだけでなく、放置していても先頭に飛び出して移動する傾向のある山羊を数頭入れておく技法も、この地域、とりわけ中近東の地域には、多く用いられていることをわれわれは知っている。いわゆる誘導羊/山羊の利用が認められるところでありながら、例えばアフガニスタンで、このような去勢もされていない山羊を含めて雌雄共に十頭ばかりを羊群にいられているケースもいくつも観察している。またギリシャやルーマニアでも、雌雄共に混じったいく頭かの山羊を群にいられているケースもないわけではなかった。しかも一般に山羊を混入している事例は、中近東にゆくにつれて、その頻度が増す傾向が認められる。またこの地域の山羊にあっては、種牡用の山羊は、そのサイズが顕著に大きくなり、際だった行動をすることが少なくない。このような個体に目をつけて、それに働きかけることで、ある程度効果的に群をコントロールしえている(アフガニスタンでカブールから南、ほぼ60キロ、ロガール県バラキ、カライ・ワジール村郊外で、筆者はこのような事例を見ている)。このように、とりたてて親和性を確立しているわけではないが、このような山羊の混入による群コントロールの技法というものも考えられ、そのような技法が先行していた可能性も考えられないわけではない。

ただこれまでに問題にしたのは、このような自然的な個体特性に依存した技法とは別個に、特定個体との親和性を人為的に創出して、群をコントロールする技法についてであった。いまここで明らかになった人為的な三技法のうち、はたしてどの技法が最初に発生したものなのか。あるいは歴史的にみて、どのような順番で、いつごろ発生したのか。またそれぞれが、どの地域にまず発生したのか。その分布についての知識をえた後で、このような疑問は当然起こる疑問である。もちろん、それを歴史的文献から知ろうとしても、先ずそれは無理であり、たかだか出来ることは、その技法それぞれの内容を検討し、かつ分布についての事実から、ある

仮説的な推論を行うことくらいである。そして、その順序を仮説的に提示するのが、ただか
できることである。ただ、このような推論をするにしても、当然そこでは、技法としてのエラ
ボレーションの度合等が考慮に入れられなくてはならない。とすれば、そのような発展段階上
の推論を行なうまえに、このような誘導羊がそれぞれ、放牧の現場でどのように取り扱われ、
どのようにその機能を果たしているのかということを知っておかなくてはならない。とりわけ、
複数雌誘導羊タイプの場合、一群のなかに、フルンターシャが十数頭もいるという事態は、も
しそれをある種のリーダと見なす限りでは、なんとも奇妙なことに見えた。このような疑問に
答えるためにも、いったいこれらの誘導羊が、放牧の現場で、どのように振舞っているのか。
それを現場で観察する必要がある。

以下、それぞれについて観察の結果を示すことになるが、のちの議論にとっての配慮から、
分布について述べた順序とは逆に、まず雌雄両性型誘導羊、複数雌誘導羊、そして去勢牡誘導
羊の順で、その結果が述べられることになる。

- 1) 群を物理的に囲わない事例は、このアフガニスタンでの観察以外、トルコ東南部、ハッカリで観
察したクルド系の牧民、またインド西南部のラジャスタンのマルワリ系の牧民、ジャムーを母村と
するバッカルワラ牧民においても等しく認めている。また、ルーマニアのビストリッツァ県のアル
ダン、シエウツを母村とする専業牧夫も、秋、村の上部で放牧するとき、夜営地を数日毎に移動
するが、その際には、夏営地では群を囲っているのに対して、まったく囲わない。野営の焚火の周
囲に連れ戻した群をまったく囲わずに、そのまま近傍でまとめて夜を過ごしている。このルーマ
ニアの牧夫にとっては、夏営地での囲いは、狼の夜襲によって驚いた群が離散するのを防ぐ意味の方
が、大きいかに思える。つまり外敵に対する防衛のための囲いであり、群をつなぎ止めるためには、
家畜化された群の場合、囲いは一般に不要であるといつてよいようである。

Ⅲ 放牧中の誘導羊の行動とその機能

1 雌雄両性型誘導羊

雌雄両性型誘導羊と呼ぶことにした、ギリシャのサラカッチャニやクレタでみいだされたマ
ナリ・マナラ・タイプの誘導羊は、先にも触れたように、生まれてすぐに哺乳瓶などで養育し
て、親和性を確立するものであった。牧民家族は、まさに家族のペットのようにかわいがり、
腕に抱えてしばしば愛撫する。また特定の固有名を与えて名を呼ぶことで慣れ親しませる。ま
た離乳したのちは、麦などを与えて、特異的に餌づけする。つまりそれらは、名を呼ばれて、
近寄れば、餌が期待できるように仕立ててある。こうして、このマナリ・マナラ・タイプの羊
は、名を呼ばれれば、餌を与えられことを期待して、呼び手の方に走りよって来る。

このようなことが関係しているのか、命令語を発して牧地での放牧中に困難なギャップを渡

らせたり、反転させたりするさいに、先導役を果たさせることはない。むしろ牧夫の呼び声で、牧夫のいる方におびき寄せることで、他の追従性のある群が、当の個体の行動にしたがうことを実現している。出発・帰着時の誘導がその典型であり、牧夫のもとへの接近を実現する呼び寄せ誘導の手段として、それらはもっぱら用いられている。羊の群と云うものは、まさに慣性の法則にしたがった生きた塊のようなものであって、キャンプ地から朝出発するとき、牧夫が手を叩いたり、走りよって、群を立ち上がらせ、一定の方向に向けて歩き始めさせようとしても、座り込んでいる羊たちは簡単に応ずるものではない。このようなとき、全体をせき立てるように刺激しつつ、当の餌を期待してはしり寄って来るマナリやマナラを呼ぶことで、群に始動を与えることは効果がある。マナリやマナラとして特定されていないものにも、その際若干の餌を与えることにしておけば、たんにマナリやマナラだけでなく、それを期待した他個体も共にやって来るというものである。このいく頭かの羊たちの特異的な始動が、他の並個体の立ち上がり、そして移動の開始を誘発する。また放牧を終えて、キャンプ地に近づいたときも、草を食べながらかえって来る群は、必ずしも迅速に家路へ向かうとは限らない。このようなときに、牧夫は先を歩きながら、このマナリやマナラを呼ぶ。すると、キャンプ地に戻ったときの麦を期待して、牧夫の方に駆け寄ってくる。こうして、群はスムーズに帰路の足を早めることになる。牧夫はその点で、群を方向づけたい方向にさきに位置して、そこからこの誘導羊を呼ぶということになる。そして、マナリやマナラが群の先頭を切るのは、こうして呼ばれたときだけである。

ちなみに、このマナリやマナラという名称自体には、なんら群リーダーという意味合いは含まれていない。しばしばその名称は、牧夫の居住地で飼われ、特異的に人の生活領域に取り込まれた舎飼いの羊をさす用語としても用いられている。まさに給餌を介して、他の個体よりは強度に、個体レベルで人づけされ、餌づけされたものにたいする名称であり、その点では、餌付けされているか、ないかが、この呼び名の弁別点になっている¹⁾。ともあれこうして、マナリ・マナラは幼児段階からの餌づけを通じて、牧夫につき、それを通じて、群を牧夫のコントロール下につなぎとめる仲介者となっているというわけである。

これら牡牝のうち、牡のマナリは成長しても、去勢されることはない。やがて種牡として利用されることもしばしばである。このことは、後の誘導羊の三タイプの発展段階を論ずるところで意味をもつので、注記しておきたい。

2 複数雌誘導羊

複数雌誘導羊は、その機能について、当初もっとも疑問の大きいものであった。というのも、もしそれがリーダー役を果たすとして、一群の中に多数いるということで、はたしてそれらは群を一義的にガイドし、方向付ける役を果たしうるのだろうか、という疑問であった。

観察は、1980年の夏、北カルパチア・ビストリッツァ県のシエウツ（Sieuț）村の牧夫が夏営を行うカリマニ山（Mt. Căliman）中で行なわれた（詳細は Tani, Y., 1989 a）。選ばれた群は、八人の牧夫が所有する、約500頭からなる群であった。この地域は、山羊も飼ってはいるが、山羊と羊とはまったく別の群仕立てで放牧されている。すでに述べたように、牧夫は、四人が組みになって、一週間毎に交代で、放牧管理をしていた。

ここでも、フルンターシャはなん匹いるかという問いに対して、その数は、牧夫によっておきく異なった。そこで、混乱を避けるために、一人の牧夫（以下便宜のためにこの牧夫を A と表記することにする）が指示するフルンターシャのみに限って観察をすることにした。じつはこの牧夫は、おどろくべきことに20頭のフルンターシャを指摘した。筆者はそれらが放牧移動中どこに居るかを明確にみるため、そのそれぞれに異なる目立つ布のリボンをつけた。そして15分おきに、三時間（12回）にわたって、それぞれが移動群中、どのような位置にいるかを記録した。

群れの動きは、あたかも流れる水のようにスムーズに動く。それぞれマークされた個体は、立ち止まり、草をはみ、走り、その都度その位置は変化した。追越したり、追い抜かれたり、また横に広がったりするため、ある個体の先頭からの順位をカウントすることはきわめて難しい。そのために、かなり先頭集団にいるときは、正確にカウントすることはできたが、それ以外は群の分散状態を考慮にいれて等分し、数十のオーダーで分けて、ほぼの位置をカウントした。20頭で12回であるので、カウントされるべきケースの数は240になる。実際には、林の陰や、他の個体の陰に隠れてみえないこともあり、カウント数は197回にとどまった。

カウントを始めて早速わかったことであるが、先頭をゆく傾向があると云われていたフルンターシャは、けっして群の先頭をいっていない、ということであった。あるフルンターシャは15番目をゆくのに、他の個体は250番目であるという具合である。あるものは、後尾から10番目や20番目であるということさえあった。またあるとき15番目であったものが、15分後には90番目であるといったことも少なくなかった。観察によれば、先頭から10番目内にいた回数は、全スコア197中、わづか9回しかなかった。この一見した数値を見るだけで、フルンターシャは決して先頭を行く傾向はないということである。

ここでもし、この20頭のフルンターシャが他の普通の羊と同様の平均的な行動特性をもつと仮定したとき、この20頭のいずれかの個体がすくなくとも先頭十番目内に出現する理論的な頻度は0.34となる。ここで観察結果について、カウントされるべき240ケースのうち、観察できたケースが197であったということを考慮にいれて、先頭十番目の中にフルンターシャが9回しかいなかったということから計算すると、その頻度の実際値は0.05%にしか達しない。実際値は理論値をはるかに下回っているというわけである。

ところで、先頭から50番目の中に、このフルンターシャが少なくとも一頭は入っている理論

の可能性は0.99となる。他方観察による実際値は、0.28である。いずれにしても、フルンターシャが前方にいた実際上の頻度は、理論的値よりは、はるかに低いのである。いったいなぜこのように実際値が理論値より低いのかについては、その理由はよくわからない。ここで、フルンターシャがある種のクラスターをなして行動しているか、要はランダムでなく行動しているという可能性を仮定することもできる。ともあれ、フロントをいくものという意味をもつフルンターシャには、普段の放牧での移動時、先頭をゆく傾向があるという自然的特性はない、と結論せざるをえないのである。とすれば、このように特異的に牧夫によってマークされたこれらのフルンターシャとは、いかなるものであるのか。このフルンターシャの機能についての疑問は、ある日の朝の出来事によって、その解決の糸口が示された。

朝、キャンプ小屋の近くで群がって夜を明かした群は、牧夫達の鋭い口笛と、追い立てるようなしぐさによって、立ち上がり、放牧地へと出発し始める。もちろん群への牧夫の随伴は二人からなり、一人は先頭を行き、他は末尾から全体を見渡しながらか後を追う。出発時、その群の一部は、すでに立ち上がって、先頭を行く牧夫について移動始めても、他はやおら立ち上がり始めているということはよくみられる光景である。要はこれら遅れて動き始めるものは、一部がすでに立ち上がって動き始めているという気配を認めてから、まさに追従性の促すところに従って、やおら立ち上がるのである。このような状況下で、効果的に群を動き始めさせるためには、一方でなお座っているものを追い立てることも必要であるが、この先に立ち上がったものを、すばやく一定方向に移動させ始めることが、他のものの始動を促すのに効果的である。そのため、先行牧夫は、日によって定められた牧地へ向かう方向に向かって、この立ち上がった羊達を招き寄せるようにして、手を叩き、口笛を吹き鳴らす。

その日、この先行牧夫は、さきにフルンターシャを指示させたAではなく、別の牧夫（以下かれをBとする）であった。ところで筆者は、このBが朝食をすませて後、放牧に出かける際に、とうもろこしの粉をボイルしたママリーガという食べ物の食べ残したひと塊を、ベルトにはさんだのを見届けていた。そして彼は、いまだ大半が座っている群の近くで位置について、鋭い口笛を吹いて群のスタートを促したあと、彼の方に走り寄ってくる羊のいく頭かに、そのママリーガのかけらを示しながら、与え始めたのである。もしそれだけのことであれば、この事態は、たんに牧夫がママリーガを餌にして、近くにいる羊をおびき寄せ、始動を加えていると記述するのでも十分であろう。ところが、このおびき寄せに乗って移動を始め、餌を求めようとする羊達のなかには、Aがフルンターシャだとして指示し、そのために筆者がリボンをつけた個体は一頭もいなかったのである。しかも、Bは、このこのおびき寄せに招かれて近づいてきた羊の数頭に、選択的にママリーガを与えた。そこで筆者は「いったいどのような個体に、ママリーガを与えるのか」という質問をした。それに対して、牧夫Bは、「かれらはフルンターシャだ」と答えたのである。要は、Bにとってフルンターシャであるものは、Aが指示し

たフルンターシャとは異なるということである。そこで筆者は即座に彼(B)がフルンターシャだとみなすものをその近傍で指示してもらった。彼は、ママリーガを示したために、彼の方へ走りよってくる先頭15頭の羊達の中から、5頭を、これらがフルンターシャだと指示した。しかもその15頭の中には、Aがフルンターシャとして指示したものは一頭もいなかった。ではAがかって指示してくれ、筆者が位置を確認し易いようにとりボンをつけたものは、どの辺りにいたか。移動し始めた羊の列の中で、それらは次のような位置にいた。つまり24, 25, 28, 55, 75, 85, 207, 245, 250, 290, 340, 345, 370, 380, 381, 390, 400, 405というわけである。彼らは500頭の列のなかで、きわめて平均した順位分布をしか示していないのである。

以上のことから、われわれは次のことを読み取ることが出来る。つまり1)フルンターシャと目されているものは、牧夫によって異なる。さきに牧夫が答えるフルンターシャの数に、個体差があることを指摘していたが、これは牧夫に応じてフルンターシャと見なされているものがおよそ異なっているからである。2)出発時に限ってのことであるが、ある牧夫にとってのフルンターシャは、口笛とママリーガによる招きによっておびきよせられ、その突出した動きによって、他の羊を追従させる役を果たすが、そのとき先行牧夫の役を担わない牧夫のフルンターシャは、まったく並羊と同じ行動をする。いいかえれば、フルンターシャは、それぞれの牧夫によって、独自に餌づけされ、個別的に特定牧夫と親和性を持ち、彼の音声命令サインに応ずるようになったものなのである。

このようなフルンターシャについての知見を得たのち、筆者は放牧地での移動中、牧夫がどのようにこのフルンターシャを利用しているかを観察することにした。牧夫は様々な音声的介入を行う。とりわけルーマニアの牧夫の音声介入は、きわめて頻度が高く、単に口笛と云った非言語的なコーリングとは別に、特定個体の色・模様パターンに応じた分類語(Tani, Y., 1980: pp. 82-85)による呼掛け、またくだくだとした罵倒語を含む語りかけ文をもって、頻繁に語りかける。そこで採集した語りかけ文の内容分析は、牧夫が群れの羊をどのようにみているかを垣間見せてくれて、きわめて興味深いものであるが、いまここでは、直接論旨と係わりがないのでその全貌を紹介することはしない(一部はTani, Y., 1982: pp. 16)。牧夫はときにある特定の当の色・模様パターンで定められた名称を、鋭い口笛と共に発する。この呼ばれる名称はひとつとは限らない。といって彼によってフルンターシャと目されている全てに対して呼びかけるわけではなく、ただか二・三頭にしかすぎない。

ところでこのような場面で、呼ばれたものがどのように行動するかを見るために、牧夫に改めて群を呼び戻してほしいと頼んだことがある。牧夫は、約200メートルほど離れたところで、口に二本指を入れて、草を食べている群に向かって、まず鋭い口笛を発した。そして「目の回りが黒いもの」を指示する分類名にしたがって、〈oacișe〉と叫んだ。しかし目立った動きは生じなかった。牧夫はそこで、〈neagra〉とさらに叫んだ。それは、他の「全身黒い毛をもつ

もの」に与えられている名称である。すると遠方で一頭の黒い羊が、牧夫の方にむけて歩き始めた。牧夫はそこで、さらにもう一度「目の回りの黒いもの〈oacişe〉」に与えられた名称を叫んだ。そしてさらにもうひとつの名を叫んだ。すると他の二頭のものが動き始め、結局動き始めた三頭の動きにつられたように、周辺の羊達がそれにしたがって動き始めた。そして再度鋭い口笛を発したためにせかされたのか、それらは足早になり、ついに群を従えて牧夫の手前にまで戻ってきたのである。

すでにみたように、フルンターシャは、決して本来的に群の先頭に行く傾向をもつ群リーダーではない。それらは、なによりもまず特異的に餌を与えられることで、個人的に特定の牧夫との親和的関係をもつようになったものである。だからこそ、出発時など、牧夫の示すママリーガなどの餌によっておびきよせられたとき、まず彼の招きに応じて、群の動きを起こすものとなっている。このような関係の上で、常に名を呼ばれ、状況に応じて命令サインを学ぶことで、それに従うようになったものになっている。そしてその起動が、他の群のメンバーの追従を引き起こす。その点で、フルンターシャは、群の動きを引き起こす引金であり、誘導因である。このような誘導が成立するためには、まづ牧夫とフルンターシャとのあいだの親和性にもとづく命令・服従関係が成立していなくてはならない。そして、先導するものに追従するという群の追従性が関与している。一般的に云って、群の個体の動きは、あたかも水の流れに似ていた。放置しておけば、慣性に従ってすでに動き出した方向へ、そのまま動こうとするかのように、大勢の流れにしたがって行く。またじっと止まっていれば、いずれかの部分が動き出そうとしない限り、いつまでもそのままの状態で居留まろうとする。方向転換であれ、出発であれ、それはそれまでの運動状態を変更することである。フルンターシャは、このようなことが必要とときに、牧夫の命令にしたがって、そのような運動状態に変更を起こす。そういう点ではいわば物理学的な意味での加速の始動因としての機能に似たはたらきをしているとも言えないことはない。

いま、このようなことが明らかになったあとでは、これまで一見不合理にみえた、フルンターシャの数の多さも理解できることになる。さきに述べたように、牧夫は、群を呼び戻すときに、最初の呼ばれた個体がすぐ応じなかったときに、他のフルンターシャを呼んだのであった。彼にとって、一頭を呼ぶか、二頭・三頭を呼ぶかは、なんら問題性をはらんだことではなかった。要は最初に呼んだものがすぐに応じなかったので、他のものをつらねだに過ぎない。いやむしろ彼にとって、一頭だけよりも、数頭呼んで、より大きな動きを起こさせ、効果的に群の動きを起こさせることは望まれたことであるとも言える。フルンターシャは、決して先頭をゆく資質をもつ生得的な群リーダーといったものではなく、牧夫の命令にしたがって、彼が望むような運動を起こす始動因であるにすぎない。その始動が顕著であればあるほど、他のものの追従を容易に引き起こし易い。フルンターシャを自然的なリーダーと見なしたときには、数多いフ

フルンターシャの存在は問題性をはらむかにみえるが、上にみたように、同じ命令に等しく応ずるものだとするならば、その数の多さは、むしろ理にかなっている、とさえ云えることになる。

結論的に云うならば、フルンターシャは、餌づけによって、特定の牧夫に親和性をもち、それに基づいて命令一服従関係をもつようになったものである。牧夫は、コントロールの効果を増すために、複数のフルンターシャを養成する。牧夫は自己の所有群をもち寄って、放牧組をなし、夏営地での500頭余りの大群をつくる。それぞれの牧夫は、自分が輪番の番に当たるとき、そして先頭牧夫の役を果たすとき、個人的に醸成した命令にしたがうフルンターシャを、自らの手先として、群のコントロールに利用する。尋ねられる牧夫によって、その数が異なるのは、けだし当然だったのである。

それにしても、さきに牧夫Aの指示したフルンターシャ20頭というのは、余りにも多すぎる数であった。しかも、放牧中の順位分布はあまりにもランダムで、しかも理論値よりも低かった。この低さが何かを意味するのか。あるいは観測時間の少なさによるばらつきによるものか。この辺りは明確でない。確かなことは、20頭などといいながら、放牧中、牧夫が誘導のために呼ぶ名前、けっして多くはなく、数頭にすぎないということである。20頭の中には、なお若いものもいた。フルンターシャの数を聞けば、多くを云うが、この中には、すでに一人前として利用しているもののほかに、将来誘導用に用いるべく、餌づけを通じて牧夫との親和性は確立しているが、まだ主に用いるに到ってはいないワカもいるというわけである。そのようなワカは、出発時にママリーガを与えられ、親和性のゆえに呼べば近づきはするものの、放牧地では最初の始動のために呼んでも、的確に反応するようにはなっていない。ただそれでも、はじめに一人前のフルンターシャを呼び、彼女が動きだした後で、ワカを呼ぶことで、その模範に従うように仕向ける。このようなことを繰り返させることで、命令サインを憶えて、やがて的確にしたがうものになる。ワカはこのようなものになるために、予め親和性を確立し、名を憶えさせている予備見習いの段階にあるものであり、牧夫はこのような若い予備見習いを含めて、その数を答えているということも明らかになった。

3 去勢牡誘導羊

それでは、最初に指摘した第一のタイプの去勢牡誘導羊は、どのような行動と機能をもつのだろうか。その大要はすでに述べた説明で理解されていると思うが、筆者はあらためて普段の行動の仕方を、それを利用しているルーマニア南部、ドブロジャで観察することにした(1980年)。そこでは、先にみたフルンターシャと並行して、去勢牡誘導羊を用いていた。また観察した群では3頭のバタール(去勢牡誘導羊)を一群中に入れていた。そこで、この3頭に、目印のリボンをつけて、放牧移動中の順位を見た。出発時、柵から出るとき、彼らはとりわけ先頭を切って出ることはなかった。また放牧地でも、なんら先頭を切る傾向は認められなかった。この

群の中には山羊が数頭入れてあったが、これらは出発時も、放牧中も、しばしば先行するのが認められた。それに対して、バトルの順位はきわめてランダムでしかなかったのである。

ただ、ときにこのバトルが先頭を切る機会があった。そのひとつは、群が川の岸辺を並行して移動しているときであった。その川には、脇から水流が、土をうがって流れ込んでいた。ちょうどその前にきたとき、群の先頭は立ち止まってしまった。その時、牧夫が口笛を鳴らし、一頭の羊の名を呼んだ。すると、先のリボンをつけたバトルの一頭が、先頭集団の後ろから走りでて、そのギャップを飛び越えた。その後、他の群はつぎつぎと後を追った。この牧夫とバトルとのあいだの命令・服従関係を成り立たせるためには、牧夫は、名を呼び、命令語を発しながら教え込むという。そして、命令どおりに行動すると塩を与えるといった。ここでも、牧夫との特異的な親和関係が基礎になっている。

それではなぜ、ルーマニアの南部では、去勢牡誘導羊バトルと複数雌誘導羊フルンターシャと云う二種の誘導羊を、一群中に並行して、育成しているのだろうか。ドブロジャの牧夫によれば、去勢牡誘導羊の働きが発揮される場面は、たんにギャップなど普通の羊が躊躇するようなところを、命令されると先頭を切って進むだけでなく、冬に雪を分けて道を開くとも云った。またフルンターシャのように呼べば牧夫の方に戻ってくるだけでなく、イタリアでの訓育法からも知られるように、いくつかの命令にしたがい、危険をあえて冒かして進むべく仕込まれている。去勢牡誘導羊を、他の誘導羊タイプとともに併用する事例は、ルーマニア南部だけでなく、サラカッチャニのもとでも認められ、ここでは、マナリやマナラという雌雄両性型誘導羊に加えて、去勢牡誘導羊が用いられていた。ここでも牧夫はこの併用の理由に対する問いに対して、去勢牡誘導羊の勇敢さ、そしてより多くの状況で利用されうということを強調していた。要はそれぞれのタイプで、効用の発揮場所が異なるという点に、併用の理由が求められていたというわけである。

4 誘導羊三タイプの発生順序

誘導羊の三タイプは、その効用において、差異をもっている。そのために、効用に応じてその有効性を認める牧夫は、二つのタイプの誘導羊を併用する。このような事例を上にもみたのだった。ただ、誘導羊の三タイプは、このような効用という文脈とは別に、性に関わる管理という文脈からみても差異がある。そしてこのことを、効用上の差異とともに考慮するとき、これら三タイプの発生順序についてのある推論を可能にさせるように思える。

いずこの牧民も、離乳期を過ぎると、母子を分離し、別群をつくらせる。また出産及び搾乳労働の時期的集中という観点から、交尾能力のある種牡は、大半が成雌からなる群に常にいておくのではなく、隔離の方法には地域によって差異があるが²⁾、秋の交尾期までは、一般に隔離しておくのが原則である。このような原則が見いだされる状況下で、雌雄両性型のマナリ・

マナラという誘導羊を用いようとするとき、実はある種の問題が、牝のマナリについて生ずる。牝のマナリは、一般に去勢されず、成牝になると共に、種牝として利用することがあると云っておいた。ところが、このような性能力のある牝は、交尾期や出産期の集中という管理上の必要から、秋の交尾期までは隔離しておくことが必要な対象となる。また交尾期に、種牝として利用するようになると、当然性的に興奮して、十分牧夫の働きかけに応じなくなる。こうして、非去勢のマナリが、誘導羊として十分の働きを期待できるのは、成熟するまでの時期に限られることになる。このようにみえてくると、雌雄両性型のマナリ・マナラ・タイプの技法で、少なくとも牝のマナリは、交尾コントロールにかかわる文脈からみて、それなりに問題性をはらむものとなる。

ところで、かかる特定個体と牧夫との親和性は、幼年期に確立しておくことが望ましい。しかも誘導羊の養育法に関して述べたことから明らかなように、個体レベルでの介入を前提とする。つまりかかる関係が、人と群個体の間で結びうるようになっていなければならない。実は筆者は、管理する群の個体に対して、牧夫が個体レベルでの関与が可能になる糸口は、毎年訪れる出産期に、牧夫が母子関係、とくに母子の授乳・哺乳関係に介入することによって強化・再生されると考えている。しかも歴史的に云って、このような個体レベルでの介入を可能にする母子関係への一連の介入を開始することを通じて、人は、考古学的な意味で云われている家畜化された群を創出するようになったと考えている(谷, 1989c)。この辺りの詳細は、近く発表するつもりである別稿の家畜化の過程に関する論文で論ずるつもりであるために、詳しく述べることは差し控えるが、その一連の介入とは、1) 出産時での特異な介入、そして2) 放置していても本来ならば行われるはずのナチュラルな実母・実子間の授乳・哺乳関係へ、お節介にも介入し、ひとまず両者を隔離し、毎日定期的に両者が出会え、子の哺乳ができるように介添する、いわばお節介な授乳・哺乳関係への介入、3) 成雌である実母が日中放牧されているあいだ、生まれてまもない幼羊をまとめてキャンプ近傍で集団保育する。このようなものであったとみている。実は多くの牧民のもとで、このような介入はいまでも毎年、出産期に繰り返されている。そしてこのような一連の介入が行われるようになった段階を、それに先行する群レベルでの人付けという家畜化の過程の第一段階に対して、個体レベルでの人付けが実現した段階と措定し、それを家畜化の第二段階と呼ぶことにしている(谷, 1989c)。

いま、このような仮説的段階と、介入の実体を認めるとするなら、じつは、雌雄両性型タイプの誘導羊は、まさにこの牧夫による母子関係介入による個体レベルでの人付けの時点で、発想さえあれば、技法として成立しうる技法なのである。要はこの母子関係への介入時に、雌雄の差異に係わりなく、特異的に候補を選び出し、ペットのように哺乳袋を用いて餌づけし、呼べば応えるようにすればよい。ただこの雌雄両性型誘導羊の技法は、うえに述べたように、交尾にかかわって、若いあいだ以外は問題性のある牝のマナリというものを含む、いわば問題あ

る技法である。それに対して、フルンターシャに代表される複数雌タイプの誘導羊の技法も、去勢牡誘導羊の技法も、このような牡の性にまつわる問題性を含まない。前者は、牡を排除し、全てを雌にすることで、雌雄両性タイプの技法で問題となる要素を取り除いた技法である。他方、去勢牡タイプの誘導羊は、雌を排除しながら、当の問題性のある牡の性を去勢することで、牡のもつ問題性を消去している。しかも去勢牡タイプの場合、とりわけ訓育法をよりエラボレートすることで、よりおおくの命令サインを教え込んで、放牧状況の中で、停止や反転、また突進と云った種々の命令に応ずるようなものに仕立てあげられたものまで生まれている。

さて以上、群内の特定個体との親和性にもとづいて育成される誘導羊／山羊による群誘導技法の三タイプを、その技法内容、またその長所・短所と云ったものに関して比較し、その特徴を示したのだが、それではそれらはどのような発生順序で生まれたのか。もちろんまったく別個に、なんらかの地域で独自に発想され、周辺に伝播して、ところによっては重複するようなかたちで、現在あるような分布を示した、ということも考えられる。また他方それなりに発生の順序と云うものがあるが、先行技法の欠点をカバーするようなかたちで成立し、先行する技法と交替ないし、並存するというかたちで現在見られる分布があるのだ。このように考えることもできる。とりわけそれぞれは、個々に、その分布域を異にしながらも、地中海・中近東地域内で採用されているとしたら、このような技法展開上の先後関係、また相互干渉的な交替・受容の事実があっただろうことも想定できる。もし歴史的な資料が残っていたならば、このようなことを検討する糸口も見いだすことも可能であったかも知れないのだが、残念ながらこのような歴史的データーがまず殆どない。とすれば、さしずめ分布上の事実と、たかだか技法上の内容から、仮説としてある種の推定を試みうるにすぎない。いまそれをあえて行うならば、以下のようなことが言えるかも知れないと筆者は考えている。

さきにその機能について述べたところでも触れたように、まず雌雄両性タイプの技法は、他の二技法に比べて、餌づけによって呼び手の方に呼び寄せるといった、狭い機能をしかもっていない。また先にも述べたように、家畜化の第二段階にはいるや、発想さえあれば行いうるような技法であった。しかも、技法としては、牡の性に関する問題点をはらんでいた。それに対して他の二技法、去勢牡タイプと複数雌タイプとは、かかる問題点を、一方は問題ある牡の性を去勢することで、他は牡を排除し、雌に集中することで解決していた。しかもそれぞれの分布の様態をみると、一部の重複地域を除けば、前者は地中海・中近東南部を水平に分布するのに対して、後者はバルカン半島についてのみではあるが、北部地域に分布するという、ある種のすみ分け的な分布を示している。しかもこの重複地域に関してであるが、ルーマニア南部にみとめられる去勢牡誘導羊の技法の利用事実は、南からの事後的な伝播である可能性が高い。もちろんそれぞれの技法が、いったいどこを中心にして発生したのかは明らかでない。それにしても、雌雄両性タイプの技法の欠陥を補うかたちで、それぞれの解決を示した技法が南北で

並行的に生まれ、それぞれがある種すみ分け的に分布した可能性は十分考えられる。このようにみると、まずさきに雌雄両性タイプと云うものがあり、他の二つが事後的発展として発想されたという、表2に示されたような先後関係が想定されることになる。もちろんこのような推論の背景には、かりに二つの技法と云うものがあったとして、一方が他方よりも、その効用においてより問題性が少なく、またより広い効用をもつと云うことが明らかな場合、効用において劣る技法が、それより優れた技法の後で発生し、それにとって代わるということは、きわめて稀であろうという前提に従っている。

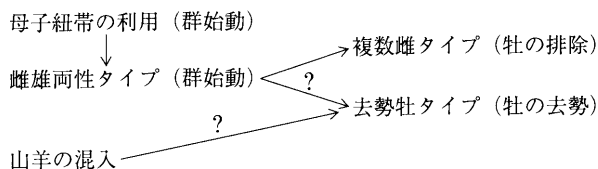
いまこのようなマナリ・マナラのような雌雄両性タイプが原初的な群誘導の技法としてまず成立したという仮説を認めるとして、ここで想起されるひとつの観察事実があることを記しておく。それはインドのラジャスタン、ジャイプール南東のカロリにおいてであったが、朝、キャンプ地から群をスムーズに出発させる際に、先導する牧夫が、一頭の小羊を脇に抱えて出発した。すると、その実母がその子への母子の紐帯に促されて動きだし、それが他の群の始動を促したのである。出発時の群始動の技法として、幼羊の餌づけと訓育を行わなくとも、母子の紐帯を基礎にした、子を介した誘導の技法があるということは、きわめて興味深い事実であった。このような技法から、マナリ・マナラ・タイプの技法への道はさして遠くないということである。

ところで、別個に想像の翼を広げて、去勢牡誘導技法に関して、もうひとつの発展経路も想定も可能であろう。筆者はさきに調査データーを述べたところで、イラン、アフガニスタンに移行するにつれて、山羊の利用が目だってくることを指摘しておいた。また本論のはじめの部分で、特定個体との親和性を人為的に創出した、上に述べたような技法とは別個に、訓育を与えなくとも、群の移動方向にしばしば飛び出して先行する傾向のある山羊を羊群に混入しておくという技法のあることについて触れておいた。このような数頭の山羊を混入する事例は、中近東にゆくに連れて、増える傾向がある。このような事実を考慮して、次のように想像するのである。

中近東を中心として、去勢ののち訓育するという去勢牡誘導羊/山羊の利用技法が発想されるのに先行して、群をスムーズに移動させる山羊の利用というものが先にあった。もちろんそれらの山羊は、人為的な訓育を受けてはいない。しかも、その山羊の牡は去勢されることもあったに違いない(張, 1986:76)。ところで、去勢すれば、当然従順になる。このようなところから、訓育を与えるという、人為的な訓育を受けた去勢牡誘導山羊がまず、中近東のどこかで発生した。そして、羊だけの群と云うものが少なくない地中海地域に移行するにつれて、この技法が羊に適用され、イタリアでその事例をみたような、濃厚に訓育を受けた去勢牡誘導羊の訓育技法と云うものが、この技法のエラボレーションとして見いだされるようになった。このように考えることも可能となるという訳だ。そして同じく別個に早くから広まっていた雌雄両

性タイプと交替して、広い分布を示すようになった。また雌雄両性タイプからの発展型として、別個の分布をしていた複数雌誘導技法と、バルカン半島の一部で南北の境を接することになったという解釈である。

表2 誘導羊の三タイプ：その発生順序についての仮説
(去勢牡タイプに到る？印はいずれとも定め難いことを示す)



ただ、このような仮説的な推論が十分納得的なものであるかどうか。いまだ分布についても網羅的なデーター収集が十分行われていない段階では、これ以上想像の翼を広げるつもりはない。どこまでもひとつの仮説的な想定にとどめ、むしろこれまで収集した広域にわたる事実から、少なくとも確かなこととなった去勢牡による誘導技法の分布に関する事実と、その発生段階についての推論をもとにして、最初に掲げた問題提起に戻ることにしたい。

- 1) 1992年冬、テッサリアのトリカラ周辺の牧民を尋ねたおり、定着性の強いヴラッヒの羊飼いたちは、舎飼いのものを、放牧羊と区別してそのように呼んでいた。
- 2) 交尾期、ひいては出産期をある一時期に集中するということは、定着農民が若干の羊を所有して、長期に乳産を確保するといった場合以外、数百頭の羊を管理するものの場合、望まれるところである。と言うのは、出産期をある時期に集中させることで、個体差を顧慮することなく、授乳、離乳、搾乳作業の集中管理的均一化が可能であるからである。そのために交尾期と定めた時期以前は、種牡を雌からなる群から隔離するのが、広く一般に行われている。ところでこの隔離の方法として、例えばルーマニアでは、専業牧夫も定着村に家をもっているために、種牡を隔離期間中家の庭にとどめておくということをしている。ただ家族全体で移動する遊牧民の場合そのようなことはできない。このような場合、成雌群とは異なって、別仕立ての幼羊の群に隔離期間中いれるといった方法がとられる。

IV 家畜と家僕

さて、ここで第一章で提起した問題に戻ることにする。筆者は、先ず去勢牡誘導羊の利用という、群コントロールの技法を紹介した。そしてこの去勢牡誘導羊が、「管理するもの(牧夫)」と「管理されるもの(群)」とのあいだで、きわめて興味ある位置どりと、役割を演じている、ということを指摘した。つまり彼は、一方において牧夫と特異的な親和性を確立し、牧夫の命令語を理解するものとなることで、管理者である牧夫の側に属すると同時に、どこまでも一頭の管理される羊として群の側に属する。つまり中間的位置をとっている。しかも彼は、牧夫の命令を解して行動することで、追従性のある他の群に命令を伝えるものとして機能するのだが、その管理者の意向を群に伝えるというこの地位を、まさに去勢、牡としての性的増殖能力を犠牲にして獲得している。そして、このような去勢牡誘導羊の位置と働きににきわめて

類似した人民管理の技法として、宦官という統治技法があるというものがある。要はそこで指摘したことは、家畜管理領域で用いられている去勢牡誘導羊による管理技法と、人民管理領域における宦官による管理技法とのアナログカルな対応の事実であった。

では、いったいどちらの技法が、アナログカルな借用のモデルとして先にあったのか。アナロジーというと、われわれはすぐ、このような借用のモデルを定めたい欲求にかられる。そして、あえてこういう設問に答えよと云わるならば、おそらくは家畜管理技法としての去勢牡誘導羊が先にあって、それが人間領域に、いわばプラクティカル・メタファーとして転用されたのだろう、と筆者は答えるだろうといった。去勢を含むこのような技法は、まず人間に適用されるよりは、まず動物に適用され易いにちがいない、と思われるからである。しかし筆者はこのようなモデルと借用という視点はさておいて、「家畜管理領域」と「人民管理領域」との二つの領域で、相同の技法があるということ自体がもつ意味に目を向け、このような事実の背景にある特定の視点に注目したいといった。もしそれら領域を異にする二つの技法が、ほぼ地域を同じくして生まれているとしたならば、そこにはこの二つの領域に含まれるものを、いわば同類として同じカテゴリーに属するもの、あるいはきわめて近い対象として同一視している可能性がある。もしそうだとするならば、そこにあるものは、どのような視点であったのか。

もちろん、このような問いに答えるためには、まずこの去勢牡誘導羊の技法の地理的分布を明らかにしておくことが必要であった。というのも、歴史的にみて、人の男性を去勢して、それを宦官として利用する技法の方は、中国よりも中近東においてより早く成立していることは、ほとんど確かなことであると考えられた¹⁾。もし、先のように二領域での技法の並行存在の事実から、ある意味を見いだそうとするのなら、しかも家畜領域での技法の方がおそらく先に発生したであろうと考えるならば、人民領域における宦官の技法に対応する、家畜管理領域における去勢牡誘導羊の利用技法が、同様に中近東を中心に分布していなければならない。じつはこのような理由から、去勢牡誘導羊の利用分布域を確定する試みを始めたのであった。

その広域調査は、意外に長い期間にわたってしまうことになったが、この広域調査の過程で、筆者は、単に去勢牡誘導羊による群行動管理の技法だけでなく、おそらくはそれに先行すると思われる雌雄両性型の誘導羊利用技法、そして去勢牡誘導羊の技法と並行してやや北方に分布したと思える複数雌誘導羊の技法を云うものを見いだす結果となった。そして、先行する二つの章で詳しく述べたことは、そのそれぞれのタイプの技法の地域的分布とその機能であったが、本来の問題設定に関連して、去勢牡誘導羊の技法に関して、少なくとも云えることは、次のことである。

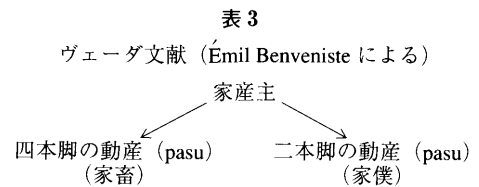
つまり、去勢牡誘導羊／山羊の技法は、実は地中海地域や中近東地域にはほぼ限られている。そして、中近東と同様に遊牧的な牧畜を広範に行なっている他の地域、インド西部やチベット、中央アジア、さらにはモンゴルといった地域では、このような技法は、技法としては成立して

いないということである。(図2, 3参照)。

ここで、「管理するもの(牧夫)」と「管理されるもの(家畜)」という関係性の中で、この去勢牡誘導羊がとる役割が、「管理するもの(皇帝)」と「管理されるもの(人民)」という関係性の中で宦官がとる役割と同形であるばかりか、両者が発想されただろう地域が同じく重なりあう。こういう事実を認めるとして、ではこのような「家畜管理領域」と「人民管理領域」という二領域での技法上の並行う現象は、ではこのような事例においてのみ例外的にみられることなのだろうか。

ここで想起されるのは、エミール・バンベニストの『インド・ヨーロッパ語の諸制度に関する語彙』の中で指摘されている、古代ヴェーダ文献の中での動産をさす〈pasu〉という語彙の用法事例である(Benveniste, É., 1969: 48)。彼はそこで、一般的に動産としての家畜を表す〈pasu〉という語が、家畜を表す四足の〈pasu〉という表現で現れるだけでなく、二足の〈pasu〉という表現をもってもあらわれることを指摘している。つまり前者が、家付きの動物(ドメスティック・アニマル)を指すとすれば、後者

は家付きの人間(家僕や奴婢などにあたるドメスティック・マン)を指すということなのである。家畜とともに、それが奴隷であるか奴婢であるかはさておくとして、家産に属する家付きの人間た



ちは、支配管理する立場からみれば、「管理するもの」に隷属し、家畜と同様に処分され、管理される対象である。このようにみるかぎり、両者は、おなじ〈pasu〉という語で示されるカテゴリーに入れることができる。この用例が示しているところのものは、家産に属する家僕と家畜との、カテゴリー上の同一視なのである(表3参照)。

もちろんこの同一視は、家畜と人間一般の同一視ではなく、家産主の管理下にある家畜と従属的な人間集団との同一視である、ということは注意しておかなくてはならない。一方は動物であり、他方は人間ではあるが、支配管理するものの目から見たとき、両者は管理するものに従属するという点で、同じ位置にある。このような見方であって、そこにある視点は、支配・管理するものの目である。ともあれ、もしバンベニストが指摘したこのような両者を同一視する視点が、思考の前提として基礎に措定されうるところであれば、家畜管理の技法の人管理の技法への拡大、ないし一定の管理技法の両領域への並行的適用は容易であったはずだといっておく。

ところで、このような視点が単にヴェーダ的世界だけでなく、古代オリエントにも存在したことを、今やわれわれは知らされている。しかもそれは、バンベニストが指摘したようなたんなる認識上の出来事、言い換えれば言語的事実にとどまるのではなく、まさにプラクティスとして、両領域のものが、同じ視点で管理されている、ということを示す事例である。そのことは、

シュメールの神殿経済文書の読みに献身している前川によって明らかにされている (Maekawa, K., 1979, 1980, 1982)。

ちなみに、彼がこのことを明らかにしたときに利用したタブレット史料は、紀元前3000年紀の神殿都市ラガッシュの二種の史料群である。その一方は、捕獲女奴隷を集めて行った織布場にたいする食物の給付記録を刻んだタブレットであり、他方は神殿が帰属農民に給付する鋤耕作用の、訓練を与えられた牛の養成所での、牛の出入りを記録したタブレットであった。

さて、この前者から明らかにされたことは次のことである。織布場は捕獲奴隷女たちの集団からなる。彼女らは一般に正式の婚姻を認められてはいないが、事実として男奴隷などとの関係を通じて、子を生む。ところでこの子どもたちの中の娘たちは、成長すると、この織布場の織布女として、この母集団のなかに登録される。いわば母集団の次世代のメンバーとして、この集団に残るのである。ところが男の息子たちは、ある年齢に達すると、去勢されて、この母集団を離れ、川船を引き上げるなど肉体労働を義務づけられた〈amarKUD〉と呼ばれる使役奴隷となるべく、この母集団を離れる。ここに、女の子は母集団に残り、男の子は、去勢されて、この母集団を離れて、他の使役に使われると言うパターンが見いだせる。

ところで、もうひとつの史料群が取り扱っている、耕作用の牛の訓練所には、一般の牛飼養者から毎年、おもに牡の子牛が提供される。一般にその多くは牡の子牛からなるが、前川は、この資料の中で、養成所にもたらされた牡の子牛が、やがてある一定期間を経て（ほぼ二才牡になって）から、先の織布女の息子に与えられていた呼称〈amarKUD〉と同じ呼称で記載され始めることに注目した。ところで、〈amar〉という語は若い（牡）牛を指すにしても、この〈KUD〉という語が付加された、この〈amarKUD〉という語が牡牛のいったいどのような状態をさすのか。このことが十分明らかでなかった。そして、「切り離された」、つまりそれは、「群から隔離された」牡牛のことであるといった解釈も出されていた。前川は、このような先行解釈に対して、この養成所の牛の出入り文書を詳細に検討して、〈KUD〉という語は、「群から隔離された」状態を指すのではなく、まさに去勢によって、男根を「切り離された」牡牛の状態を指す語である。〈amarKUD〉と呼ばれるようになった牡牛は、去勢されて、訓練を受け、やがて命令にしたがって農地で鋤を引く、耕作用の牡牛として農民に貸し出される段階になった牡牛を指す。こういうことを明らかにしたのであった。

彼はこうして、耕作用の牛の養成所に関する資料の正当な読みを行ったばかりか、母集団化ら切り離され、肉体労働に用いられるようになった先の織布女の息子が、〈amarKUD〉とよばれているという、耕作用の牡牛への呼称との一致の事実についても、去勢され、労働用に用いられるべく養成された牡牛への呼称が、その取扱いの類似性から、織布女奴隷の息子を指す語に転用されることになったのだ、ということを明らかにしたのである。

ここでこの少なくとも地中海・中近東地域での家畜群経営者が採用している一般的な群経営

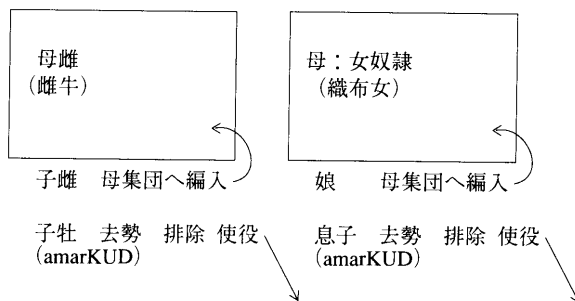
の手法、とりわけ性に応じて異なる取扱いについて述べておくことは意味があると考えられる。彼らは毛や皮もちろんであるが、主にその雌がもたらす乳産、そして肉からもたらされる収入にその生活を依存している。そのような経済資源をより多くうるためには、群の頭数を殖やすことが肝要である。ここに、毎年子を生み、かつ乳をもたらす雌はできるだけ多く手に残すという戦略が立てられるのは当然である。それにたいして牡に関しては、種牡候補を数頭残しさえすれば、他の牡は不要であるばかりか、かえって群の安定を乱すもの、かつ飼料の端境期がある場合には、いわば徒食者とみなされるものである。こうして、シュメールで農耕用の牛として神殿に納める事例が認められるようになる以前から、種牡候補以外は、去勢・肥育の後に肉用として屠殺されるか、去勢の後に、労働力として利用されるべく、群から排除されるということが、牧民経営下での、牡の通過しなければならない一般的な運命であったと考えられる。

こうして、種牡候補以外は、去勢して肥育し、肉資源として処置するか、畜力利用の考えられる牛・馬の場合は、去勢し、用途に応じて馴化して利用に供する。言い換えれば、「雌は手元の母集団に残し、種牡以外の牡は去勢して、経済資源ないし労働力資源として群から出す」。このような原則が、すくなくとも牛家畜経営者にとっての一般的経営戦略となっていたと考えてよい。こういう家畜経営者からすれば、牡の貢納としての提供は、雌の提供に比べれば、より容易なことと見なされていたに違いない。この地域では、神殿での消費、あるいは供犠用の家畜として、牡がおもに貢納として用いられる事例は少なくないとされている (Briant, P., 1982: 92, Digard, J. P., 1976)。いまこのような経営に関する文脈から必然的に導かれる雌・雄の異なる取扱いがもつ経済的意味だけでなく、宗教・政治イデオロギーにまで及んだであろう意味については、別稿を立てて考察する予定であるが、ここで興味あることは、前川が、養成所にもたらされて以後、耕作用として訓練を受ける牡牛、〈amarKUD〉という名前が、まさに平行的な位置をとる去勢され肉体労働のために使われる織布奴隷の息子たちを指示するメタファーとして、転用されているということを明らかにした点である。

考えてみれば、織布女奴隷の子どもたち、その男女それぞれがたどる生の軌跡と、耕作用の牛養成所に子牛を提供する牛飼養者のもとの子牛たち、その牡雌それぞれがたどる生の軌跡とは、性に応じて同じ並行性を示す。雌の子牛（あるいは娘）は母群にのこされ、牡の子牛（あるいは息子）は去勢されて母群から出される。ここで注目した

表 4

シュメール文献 (前川; ラガッシュ, BC. 2000初)



いのは、たんに一方の領域での言語表現が、メタファーとして別の領域にある対応項に転用されているということだけではない。重要なのは、牛管理に於ける雌雄に応じて異なる取扱い方が、いわばプラクティカルなメタファーとして、織布奴隷の子どもの男女に応じて異なる取扱い方に、そのままプラクティスとして適用されているということである。言い換えれば、織布女奴隷とその子どもたちの世界を、牛群とその子どもたちの世界に見立てて、雌雄それぞれに異なる管理技法を男女に適用し、その結果として、去勢された牡牛に対応する位置をとる去勢された男子の項が、同じ名前と呼ばれることになっている、ということなのである。

こうして、家つきの二本足の動産(pasu)＝家内奴隷(domestic serf or slave)と、家付きの四本足である動産(pasu)＝家畜(domestic animal)とが、単にカテゴリーとしておなじものとして同一視されたばかりではなく、おなじカテゴリーに属するものとして、同一の取り扱いをうけている証拠がここにある、ということになる(表4参照)。

以上、家産主のもとで、動産として所有され、隷属する家畜と家僕とを、「管理するもの」の立場から、おなじカテゴリーに属するものとみなして、共通の語で指示するばかりでなく、同じ管理対象として同じ管理技法を適用する。このような視点を、古代オリエントのシュメール世界の事例に見た。まさにこの地域で、われわれは去勢牡誘導羊という技法の展開を見いだしたのであった。そしてその技法の人民管理領域での対応物を、やはりこの地域に早く成立したと考えられる宦官の利用のうちに推定した。前者は、「管理する」集団が「管理される」集団を、性に応じていかに別様に利用するかという、「管理されるもの」の性に応じた利用の技法に関してである。後者は、「管理するもの」の意をいかに「管理されるもの」に通じさせるかという技法に関してである。それぞれ文脈を異にししながら、家畜領域のメンバーと家僕領域のメンバーとが、同様の視点で見られることで、技法上の並行現象が生じていると云えることになる。もしこのような推論が妥当だとすれば、ヴェーダにおける〈pasu〉という言葉の用法にみた、家畜と家僕とを、「管理するもの」の立場から同じカテゴリーに属する被支配対象としてみる視点が、そこにも見いだせることになる。

以上、去勢牡誘導羊(山羊)と去勢男性としての宦官という、異なった意味領域での並行性が、単なる偶然な一致ではないだろうという仮定の上で、検討を行ったが、ここに示したような事例からみて、このような技法上の一致の背後に、家産に所属する家僕(ないし人民)と家畜という「管理されるもの」を、同じカテゴリーに属するものとしてみる視点が働いており、その視点とは本来、古代の地中海・中近東地域の家産主たちの立場に立つものにおいて抱かれた視点ではなかったか。そしてその視点にもとづいた技法上の並行現象の一例を、去勢牡と宦官の相同性のうちに見たい。本論の結論はこういうことである。まさにそこにあるものは、管理者的なイデオロギーであり、管理される対象が動物家畜であれ、人間家僕であれ、それらは自己に従属するアニメートな存在であるかぎり、等しく従属するものとして、ひとしい。この

ような視点が、性に応じて異なった取扱いを含むいくつかの管理技法を、両領域にひとしく、発想させることになったのではないだろうか。

さいごに、さきに示したように、去勢牡誘導羊の利用はもちろん、他のタイプの誘導羊の利用技法も、どうやらインドにはいるとともに消滅するようである。また中央アジアから蒙古にかけての地域にも、このような技法は見いだされないという。いったいこのことは何を意味するのか。単にこのような誘導羊の利用技法が発想された起源中心からの遠さだけに帰することができる問題なのだろうか。それとも、さきに析出したような家畜及び人に対する視点とは異なる視点が、ある種イデオロギーとして措定されているために、このような技法が採用されにくかったということか。つまり「管理する」家産主によって「管理される」家畜といった視点、また広く云って「管理する」・「管理される」というきわめて支配者的な文脈にもとづいた視点を、受け入れ難いナチュラル・イデオロギーとでも言えるものがあったためなのだろうか。この辺りは、地中海・中近東地域で家畜ないし広く動物の生というものが、どのように見られたかという問題とかかわりつつ、次の論稿で考察される予定である。

参考文献

- Baskin, L. M. (1974): Management of the ungulate herds in relation to domestication. In *The Behavior of Ungulates and Its Relation to Management* (Geist, V & Walther, F. eds.), IUCN Publications, N. S. 242, Morges. pp. 530-542.
- Benveniste, É. (1966): *Le vocabulaire de institutions indo-européennes*, Tome 1, Les Éditions de Minuit, Paris.
- Briant, Pierre, (1982): *État et pasteurs au Moyen-Orient ancien*, Maison des sciences de l'homme, Paris.
- Bynon, J. (1976): Domestic animal calling in a Berber tribe, In *Language and Man* (McCormack, W. C. & Wurm, S. A. eds.), Mouton, Paris, pp. 39-65.
- Campbell, J. K. (1984): *Honour, Family and Patronage*, Clarendon Press, Oxford.
- 張承志 (1986): 『モンゴル大草原遊牧誌』(梅村担訳), 朝日出版社。
- Delamarre, M. J. B. (1975): *Techniques de production: l'élevage*, Édition de Musée Nationaux, Paris.
- Digard, J. P. (1973): A propos des aspects économiques de la symbiose nomades-sédentaires dans la Mésopotamie ancienne: le point de vue d'un anthropologue sur Moyen-Orient ancien, XXe Congrès Intern. des Sciences Humaines en Asie et Afrique du Nord, Mexico.
- (1981): *Techniques de nomades baxtyâri d'Iran*, Cambridge University Press, Cambridge.
- ガヴィーノ・レッダ (竹山博英訳) (1980): 『父—ある羊飼いの教育』, 平凡社。
- Guilaine, J. (1976): *Premiers bergers et paysans de l'Occident méditerranéen*, Mouton, Paris.
- Hasedeu, B. P. (1976): *Etymologicum Magnum Romaniae*, Editura Minerva, București.
- Hatt, G. (1919): Notes on the reindeer nomadism. *Memoirs of American Anthropological Association*, 6: pp. 75-133.
- Henckel, A. & Schöne, A. (1967): *Emblemata: Handbuch zur Sinnbild Kunst des XVI und*

- XVII. *Jahrhunderts*, J. B. Metzlersche Verlagbuchhandlung, Stüttgart.
- 小林茂樹 (1990): スイスの哺乳桶, 『リトル・ワールド通信』 33巻: 18。
- Maekawa, K. (1979, 1980 & 1982): Animal and human castration in Sumer, *Zinbun* 15: 95-140, *Zinbun* 17: 1-56, *Zinbun* 18: 92-122, Research Institute for Humanistic Studies.
- 松井健 (1980): 『パシュトゥン遊牧民の牧畜生活—北東アフガニスタンにおけるドゥラニ系パシュトゥン族調査報告』, 京都大学人文科学研究所。
- 松原毅 (1983): 『牧畜の世界—トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』, 中央公論社。
- (1988): 『青蔵紀行—楊子江源流域をゆく』, 中央公論社。
- 三田村泰介 (1693): 『宦官』, 中央公論社。
- Rinley, T. & Caughley, G. (1959): A study of home range in a feral goat herd. *New Zealand Journal of Science*, 2, pp. 150-170.
- Serpell, J. (1989): Pet-keeping and animal domestication: a reappraisal. In *The Walking Larder* (Clutton-Brock, J. eds.) Unwin and Hymann, London: 10-21.
- Shikano, K. (1984): On the stability of the goat herd in the pastoral Samburu, *African Study Monograph*, Supplemental Issue 3, pp. 59-69.
- 谷 泰 (1976 a): 牧畜文化考—牧夫—牧畜家畜関係行動とそのメタファー, 『人文学報』 42, 1-58, 京都大学人文科学研究所。
- (1976 b): 『牧夫フランチェスコの一日』, 日本放送出版協会。
- (1977): イタリア中部山村移牧羊の管理について—主にアブルッツォ・チェルクエト村調査より, 『ヨーロッパの社会と文化』 (会田雄次・梅棹忠夫編), 京都大学人文科学研究所。
- (1979): 習性と文化のあいだ—南西ユーラシアの羊飼いを訪ねて, 『季刊民族学』, 千里民族学振興会。
- Tani, Y. (1980): Man-sheep relationship in the flock management techniques among north Carpathian shepherds. In *Preliminary Report of Comparative Studies on the Agro-Pastoral Peoples in Southwestern Eurasia* (Tani, Y. eds.), Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto University, Kyoto, pp. 68-86.
- (1982): Implications of the shepherd's social and communicational interventions in the flock—from the field observation among the shepherds in Roumania. In *Preliminary Report of Comparative Studies on the Agro-Pastoral Peoples in Southwestern Eurasia* (Tani, Y. eds.), Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto University, Kyoto, pp. 1-18.
- (1987): Preliminary notes on the flock management techniques of the Bakkarwala and the Ladakhi shepherds in the northwestern India. In *A Preliminary Report on the Studies on Millet Cultivation and Its Agro-Pastoral Culture Complex in the Indian Subcontinent (1985)*, (Sakamoto, S. eds.), Research team for the studies on millet cultivation and its agro-pastoral culture complex in the Indian subcontinent, Kyoto University, Kyoto, pp. 78-88.
- (1989 a): The geographical distribution and function of sheep flock leader: A cultural aspect of the man-domesticated animal relationship in southwestern Eurasia. In *The Walking Larder—Pattern of Domestication, Pastoralism and Predation* (Clutton-Brock, J. eds.), Unwin Hyman, London, pp. 185-199.
- (1989 b): Group organization and herding techniques of the Bakkarwala in Kashmir. In *A Preliminary Report on the Studies on Millet Cultivation and Its Agro-pastoral Culture Complex in the Indian Subcontinent, II. (1987)*, (Sakamoto, S. eds.), Research team for the studies

- on millet cultivation and its agro-pastoral culture complex in the Indian subcontinent, Kyoto University, Kyoto, pp. 81-94.
- 谷 泰 (1989c): (口頭発表) ドメスティケーション・プロセスの二段階—鹿野報告へのコメント, 「京都フィールド研究者懇話会・一九八九年シンポジウム (12月16日, 京大会館), 「ドメスティケーション・プロセス」 (オーガナイザー: 松井健)。
- Tani, Y. & Matui, K. (1980): The pastoral life of the Durrani Pashtun nomads in northwestern Afghanistan. In *Preliminary Report of Comparative Studies on the Agro-Pastoral Peoples in Southwestern Eurasia*, (Tani, Y. eds.), Research Institute for Humanisitic Studies, Kyoto University, Kyoto, pp. 1-31.
- 鄭仁和 (1992): 『遊牧—トナカイ牧畜民サーメの生活』 筑摩書房。
- 利光有紀 (1988): 毛を刈らない去勢山羊の話, 『民博通信』 39巻, 国立民族学博物館, 大阪・千里。
- 小長谷 (旧姓利光) 有紀 (1991): 『モンゴルの春』, 河出書房新社。
- Telceanu, R. (1979): *Terminologie oireasca in Comuna Maieru, Județul Bistrița-Nasaud (Lucrare pentru obținerea gradului I)*, Ph. D. Dissertation.
- Trinchieri, R. (1940): *Vita di pastori nella Campagna Romana*, Fratelli Palombi Editori, Roma.
- Vlăduțiu, I. (1961): Almenwirtschaftliche Verhaltung und Transhumance im Brangebiet (Südost-karpaten, Rumanien). In *Viehzucht und Hirtenleben in Ostmitteleuropa-Ethnographische Studien*, (Béla Gunda eds.), Akademiai Kiado, Budapest.
- Vuia, R. (1964): *Tipuri de Păstorit la Romîni*. Editura Academiei Republicii Populare Romîne, București.